

初時雨けふこの山のかひありてまづいろ染めつきみが言の葉  
隣雲にいたりてかれいひなど催しくふほどに、しぐれも過ぎぬ。北山のかた  
ぞいますこししぐるるけしきなる。日影いまだ南のかたよりさしいりたる、  
まぢかき瀧の音も、とりあつめたる興なれば、

しぐれせし雲のとなりの晴るる日にそれかとまがふ瀧のおとかな  
見渡せば池のめぐりここかしこ紅葉のやうやう染めいでたるもあはれな  
り。またかくなむ。

このあきはいまひとたびと思ふをも知らずや早く染めしもみぢば  
池の西なるひきき木どもの上より、間近き山の麓に、ゆふげの烟立ち、民家な  
どは見えず。

ひとむらのたけをへだつるゆふけぶりま近き山のふもとにぞ見る  
それも晴れぬれば、とほき景どもも見ゆ。ひつじ申のかたに、頂まろき山のお  
なじさまなる、ふたつ並びてあり。その北の方の山のすそなる山あひに、何な

らむ白く見ゆ。遠目鏡にて見れば堂の棟なり。いづくなるらむといへば、かし  
このあたり知りたる者に問ふ。ふたつ同じやうに見ゆる山は雙の岡なり。山  
あひに見ゆる堂は嵯峨の法輪寺ならでは、かしこに高き堂はなし。それなら  
むといへば、はるかに思ひかけざるあたりを見やることと思ひて、口にまか  
せて、

はるばるとならびの岡のやまあひに見ゆるいらかや嵯峨のふる寺  
いまだ日も高ければ、例の一乗寺山にもゆかむとて、天満宮の前に祈念して  
後、やがて山にのぼりて松茸を採る。また山づたひに端山へもゆきぬ。ここに  
ても高きのぼりて、また松茸をとる。この山のまつたけははじめとりぬ。さ  
てかへらむとするに、思ひしよりも日のかたぶきて見ゆれば、心あわただし  
くて、

分けつくす端やまのおくのみち遠みくれぬさきにと急ぐかへるさ  
端山の嶺より山路十町ばかりもあらむを、休らひもせですぐに隣雲にかへ



りぬれば、日もやうやうくれかかりぬ。このかへるさにぞすこしは足もいたみける。今朝さがり松のあたりなる休幕にやすらひて、供奉の輩まで、菓子なとくひ、かはらけとりしついで、押小路三位供奉にあれば、今日の心ばえを詩につくりて見せよといひしを、つくり出でたりとて書きて奉りしを、端山よりかへるさの道にてありしかば、隣雲にてぞ見る。

仲秋幸<sub>二</sub>于修學院<sub>一</sub> 忝蒙<sub>二</sub>尊命<sub>一</sub> 謾賦<sub>二</sub>一律<sub>一</sub> 實岑上

戴<sub>レ</sub>星隨<sub>二</sub>玉輿<sub>一</sub> 晴日爽<sub>二</sub>衣裳<sub>一</sub>

疊<sub>レ</sub>碧巒<sub>二</sub>山簞<sub>一</sub> 飄<sub>レ</sub>皚瀧<sub>二</sub>水長<sub>一</sub>

鹿眠香稻圃 鳥啄露蓼傍

仙景仙臺興 千秋須<sub>レ</sub>靡<sub>レ</sub>疆

和韵によみてつかはせし。

をり毎にあかぬ野山の秋の色はいまいくたびの後もかぎらじかくて壽月觀にいたりて晚炊などとりまかなひて食ふ。夜もやうやう更け

ぬらむとて歸る。京につきてとへば、亥のなかばにやといへば、しきりに夜半の鐘の聲ぞきこゆる。

つとめての日は釋迦院前大僧正有雅 理性院大僧正 興親 日嚴院前大僧正 興珍 六條前中納言 石山前宰相など 山莊見に行くべきよしかねて仰せたり。釋迦院とし九十一歳なれど、たぐひまれなるばかり壯健なる老僧にて、山莊のめぐりの山山残らずあゆみ、松茸など採りてひねもすよろこびて歸りしとなむ。

享保九年

長月のなかばも過ぎぬれば、やうやう紅葉も染めわたすに、悠然臺にのぼりて見れば、東山ここかしこに、うすきも濃きも見ゆれど、山莊の上なる山には、いまだいささかも見えず。あづかりのもの、壽月觀のあたり池のめぐりなどは、紅葉さかりなるよしを申せど、高き山のみちこそは、はたはりひろき蜀



錦をひきはへたるやうに見えしかども、今年はいまだ染出したるけしきも見えねば、その盛を見むとて日を送り、二十七八日の頃にや、ややさかり過ぎ散りゆくも多し、早くもよほされよかしなど、あづかりのものたびたび申せど、臺にのぼりて見れば、ひとひ見し如く、山には染めたるも見えず。いましばらくと思ひしほどに、神無月にもなりぬ。朔日のあしたあやしき夢をぞ見る。伊勢物語の講釋をするとおもひし、そこに舊院ありしよの御さまにておはして聽聞し給へるが、久しき間に、御情はつきすやと仰せられし程に、一部を五度により申さむと思ひ給へてなむと奏しつれば、今日はまづそこまでに御休息あれよとのたまひしを、かしまりうけたまはりて、いく段かよみつるぞとて、數へ見るとおもひしほどに夢さめぬ。山莊にゆく前つかた、舊院を夢に見奉ることは、これにて三度におよべり。まことにあやしく妙なることになむ。

三たび見し中にもわきてことの葉をかはせる夢ぞさらにうれしき

かくて二日にや、また臺にのぼりて見れば、今日ぞかの山に染めいでたるけしきす。こしは見ゆる。さらばとて七日に行くべきよしを仰す。六日の曉起きいでて見れば、昨日より晴れわたりたる空、一點の雲もなく、星はかすなくきらきらしたり。

いさぎよく霧もまがはぬそらのいろに、こころもはれてむかふ横雲明渡るほどになりて、門を出で野をゆけば、田の面の霜の色寒きを見るもめづらし。

置きわたす霜にぞしろきあさばらけ田の面の草はかれぬみどりもむかひに見つつ行く杜の陰に、うすくこき紅葉あまたあり。これは下賀茂の杜なり。

見つつゆく賀茂の河原のあさあけにま近くなりぬもりのもみぢばやがて下賀茂にいたり、まづ社頭にまゐる。いささか祈念の後、例の細殿にきて、菓子やうのものくひ盃などとする。按察使の前大納言、石山の前宰相よりは



じめ、供奉の輩もみな菓子くひさかづきとる。このしばらくのほどに、朝日はなやかに出でて、くもりなき影ぞさしくる。

やはらぐる神のひかりもそふるやと朝日世に似ぬ賀茂のみたらしこのわたりに、いちひの木ありとかねてうち聞きて問はすれば、これなむそれと教ふる木のもとにたちよる。北の築地の方によりて一本ある木なり。みづから小き枝を折りて見る。かしはの木葉に似たるものなり。花はかはれり。梨の花のやうなるものしほみて枝につきたり。さてここを出でていづみ河にいたれば、いつも見しことなれど、河の上下はるばると見わたされて心ぞのぶる。橋を過ぎて野にいづれば、今朝より晴れたるけしきにも似ず、河河の水烟立ちて、山のふもとなどは見えず。

晴るる日も野はべはかくそとかくこそと朝かはの水のけぶりにくもるやまもといささか行くほどに、北時雨降りきて、供奉のもの皆笠をとる。されど行くかたの山などはくもりもあへず。とかくするまにやがて晴れ行きて、日のかげ

またさやかなり。

ひとしぐれ過ぎ行くあとの朝日かげ晴れてさやかにむかふ野の末など口すさびて行く。鶯の森といふ所のこのもとに、白鶯のひとつおりゐるを見て、

おりゐるもところがらなる鶯のもりとはでもおのが名のる計りに北にはるかなる野すぢを、柴いただきたる賤の女どもの、あまたうち連れてとほるを見る。これはひととせありし興なれども、そのをりは朝霧深く立ちへだてて、はかばかしくも見ざりつるといひしを聞きて、今日またわざと、よきをりにとほらせたるなるべし。

賤の女がいたたくしばのしばしともいはせて過し野邊のをちかた山山のふもとに紅葉あれば見つつぞゆく。

やまやまのふもとにつづく紅葉ははこころぞ行きてをる計りなるゆきゆきて山莊近くなるに、比叡の山の前にかさなりてむかへる山にぞ、も



みち多く見ゆなるを、とへば音たに山といふ。音羽河の水上なりといへり。比叡の山なる音羽の瀧といへる、このやまの瀧なるべし。

音羽がはせき入るるいけのみなかみや比叡の高嶺につづくこの山かくて山莊に行きつきぬ。壽月觀の庭に楓の木はあまたあれど、ちりぬる梢おほくて、今さかりなるはただ二木三木ぞある。

二木三木のこるちしほをけふぞ見るほかのさかりは過ぎし軒端に野にあゆみ出でて、山にのぼらむとする道のなかばにて見れば、北なる山ごしに比良の高根雪いと白し。

おもひこし紅葉をおきてまづぞ見る初ゆきしろき比良のやまの端山にいたりてまづ池の西をめぐる。道のほとり池の汀にあるはみな散りぬれば、落葉をぞ踏みわくる。山の紅葉を見むとてすこししつらひし所あり。そこにいたりて見れば、山には色うすく見るところなき紅葉ぞすこしばかり見ゆる。今年は山の紅葉染めもつくさで、大方はちりぬるさまなり。念なくお

もほゆれどもせむかたなし。

まばらなるやまの紅葉はよそながら去年見し秋のおもかげもなしよそにこそ見つる千入を待ちしまにちりて紅葉ののこりすくなきことし見ぬ千入をこそよそにしてまた來む秋をけふさへぞ待つ

また

よしさらばまた來む年のあきだにもありしちしほを染めよやま姫かくいひてまづ三社の山へのぼる。二所の坂みちやすらひやすらひなどして神前にまわりいささか祈念す。

老のさかのぼりて今日もいのおくねがひはみてよ三のみやしろこの坂をおり、道より洲崎ある嶋にゆけば、むかひなる岸根に、水鳥どもうかびるたり。見れば緑頭の鴨二つがひ、をし鳥三つがひぞある。をしどりははじめて見たるなどといふもあり。

おどろか遊べるいけのをしかもはめづらしと見る人やまちけむ



それより隣雲軒にいたりぬれば、ひととせ來りし折に、色濃くさかりにて、めできこえたりし軒端の一本は、今日もさかりにて、千入染めつくしたり。またこれをめでて、

軒ちかみなれしひと木の紅葉こそ今日もちしほのさかり見せければ、外の散るのちとをしへぬもみぢばもこころありてや染め残しけるわさ

この秋はふたたびめづるもみぢ葉にこころの色ぞ染めかへしぬるそのわたりの木のもとごとくに、色よき紅葉のおほくちりつもりてあるを、若き女房どもの手ごとくにひろふを見て、

紅葉ばをひろふ少女よこころあらば袖にこき入れて家づとにせよ  
また

たらちねのしめおく山のもみぢ葉は末の代までのみゆきまたなむここにてかれいひなど食ふほどに、日もやうやうかたぶきて、池の面に晴れたる影の、ささ波にうつりて玉をしけるやうなり。

夕日さすいけみづひろみひかりある玉をよすると見ゆるささなみなどいひて赤山の御社にまうでぬ、鳥居あるわたりまで行きて、すぐに山にのぼれり。例の淀河を遠目鏡にて見れば、淀河は遠き山の上に流れて、すこしひきく前にある山の上に、また一すぢぞ見ゆる。これを問へば桂川のすゑにてあるべし。下桂のわたりにては、河水南へまはりてぞある。それならむといふ。

山の端にふたすぢひといしろきかひいは水は繪にかけるをもまだ見ざりけるりい山をおりてこしらへおきたる床にきつつ、菓子やうのもの人人食ひて盃などとする。その間に日もいたりたり。西なる野のかたを見やれば、今朝道にて見しやうに、また水烟立ちて京のかたも見えず。

夕日かげいりぬるのちの野邊はまた水のけぶりぞ今朝にかはちぬまだくれぬほどに、壽月觀にかへりなむとす。其道より林丘寺に行き、老禪尼に謁し申す間に、日も暮れぬ。弟子の宮も今はこころよくなりて、さいつ頃歸



寺してあれば、今日は寺のさまにぎはしくぞ見ゆる。しばらくありて、壽月觀に歸りぬ。林丘寺の宮のよめる。

この山の木木の紅葉は色に出でてよろづ代までもみゆき待ちえよかへし

よろづ代も来て見むわれをこの山の紅葉とともにきみも待ちえよ女二の宮のよめる

もみぢ葉もめぐみの露に染めまして幾千世あきのみゆき待つらむかへし

幾千世の秋もさそはむわれを待つもみぢのさかりきみに知られて大藏卿權右中將供奉にありて詩を獻す。

謹奉陪從太上法皇幸于修學院謾賦一絶

霜染寺邊幾樹楓

君王遊豫到離宮

天風亦欲裝輦路

滿地吹鋪錦繡紅

爲 範上

奉從上皇幸修學院賞楓葉應製

楓葉飽霜景色寒

幸從鳳駕歷林巒

行行錦繡供帷幕

孰若春山花日看

光 潔上

晚炊などとりまかなひ、みなみな盃とりなどするに、やうやういぬのなかばにも過ぎぬべし、さらばとてかへる。道のほど月さやかにて、野をゆくほどいと興あり。

さざれゆく水のねすみぬつき見つつ過ぐる川邊やさ夜ふけぬらむかへりつきぬるは亥のなかばにも過ぎぬらむかしつとめての日かねてより烏丸の大納言、三條の中納言、武者の小路の三位などに、山莊見すべきよしを約して、式部權大輔に案内すべきよしを仰せおきてたりし。今日もあしたの程より、ころよく空はれわたり、日影うるはしくて、ひねもすかなたこな



たを見つつ入興せしあまり、おのおの一首の和歌をつらねたるとて、書きて奉りしかば、やがて返歌を書きてつかはせし。

鳥九大納言

わけこしもめぐみの露の色深き山の紅葉をあだにやは見む（見イ）  
かへし

色深き言葉の露をかけてこそ山のもみぢも染めまさりけめ（れイ）

三條中納言

いかに見むとしどし毎（こイ）に御幸して君が心をそむるもみぢば  
かへし

見る人の心そめけるもみぢばは浅きも深きいろとなりけむ

武者小路三位

御幸待つためとやわきて露霜も千入そめたる木木のもみぢば  
かへし

昨日さへすくなき木木の遅紅葉ちらで（やイニナシ）やありけむ如何（ぞイ）とぞ思ふ

桑原前宰相（三位）

このやまの紅葉もさぞなけふよりはまた來む秋の御幸待つらし  
けふ八日なれば、古今集七夕の歌に、八日の日よめると詞書ある歌  
に「けふよりは今こむ年の昨日をぞ」といへるをおもひ出でてよめ  
るよしを申す。

かへし

紅葉ばもまたこむ秋をいつしかとめでし人ある今日よりや待つ  
「いつしかとのみ待ちわたるべき」とある下の句の言葉にてかくなむ、このつ  
いでに武者小路前大納言久しく所勞にて出頭なきゆゑ、けふも山莊見せざ  
りし事をいひつかはして、一首よみてたてまつるべきよしを仰遣はししか  
ば、またつとめて奉れりしうた。

ますかげもほかにあらめや君が見しこのもかのもの山の紅葉ば



かへし昨日の如くならむも念なくて、ふるきためしもあれば、五句のおきと  
ころをかへず、よみてつかはす。

ますかげもありとはいつか比べ見むこのやまならぬ山のみぢは  
これならでほかにあらめやいくちしほ添ふる紅葉の大和言の葉  
いく秋もわがたらちねの君が見しためしとてこそめづる紅葉は  
この秋はふたたび行きて我が山のこのもかのも紅葉をぞ見し  
見せばやなふかくも染めぬ木木ながら我が庵しむる山の紅葉は  
應 御製又獻五首

實 陰上

かぎりなく仰ぐ言葉のにしきにはしかじいづくのもみぢなりとも  
もみぢする秋の千しほの山よりも添ふるおもひぞ深くかしこき  
御代ながくありしためしともみぢばも君こむ秋を千世も染むらめ  
いくたびも御幸はまたむはるあきの紅葉もはなもあかぬまにまに

千世かけてしむる紅葉の山までもつかふるあきにあひ見てしがな  
これを見よろこびて、くりかへし吟じて、

限りなき秋の紅葉ためしばあとしあればあかぬまにまに千世も見てしが  
などいはばやと思へど、五言の言葉を一首によみたるばかりにて、あまりに  
させるふしもなければ、ただ女房のふみの中にかかせて、そと見せにやれる  
になむ。

享保十年

今年は五月の花を見むとて、卯月の末の六日例の山莊に行く。まづ下賀茂に  
いたりて、河合の社の前に輿かきすゑさせ、拜殿にのぼりて二拜をす。それよ  
りやがてあゆみてすぐに社頭にまゐる。此所をあゆみて行くことは、此度な  
むはじめなれば、ひろき芝のおもて杜のうちなど、めづらしく見わたさる。  
河合のみやよりけふはおち立ちてもり行くみちもとほきひろまへ



樓門のうちにいたり、かたはらにて手洗ひ口漱ぎなどして、今日は舞殿にのぼりて兩段再拜す。細殿にて例のかれいひとりまかなひ、とばかりありて歸りいづ。いづみ川のかは邊をあゆむほど、四町ばかりもやあらむとおぼゆ。川のはばつねよりもひろく長くして水音すみ、いさぎよきこと心をも洗ふやうなり。

見て過ぎしいく春秋かこころのみさそへる水のかはべ行くらむ  
これも道のほどにて思ひつらねし。

またも見むただすの森の木かげみち行くみづ清きかはべづたひは  
それよりわざとまうけたる橋をわたりて野に出づ。高野川の西に休幕まうけたれば、そのうちに入りぬ。幕もあげさせてすぐに東の野山にむかふ。しばらくやすらひつつ、供奉のともがら末まで盃とりなどして、また輿に乗りて行く。そのほどにくもりぬれば、行くべきかたの山は見えす。

さして行く道はるけしな八重に立つ雲のあなたのやまのふもとは

さがり松にいたりて、しばらく輿をとどめさせて松を見る。此所にはじめてこし時までは、いにしへよりの枝五間ばかりもさがりて、名におへる松のさまなりしが、ひととせ大風に、その枝なかばより折れて、いまはさがり松といふべくもあらず。

名こそ世にとほく残らめさがりまつわが見し枝もいまはなくして  
山莊にいたりぬ。道のほどいとあつかりしかば、しばらく壽月觀に涼みて五月の花を見る。故院の御時うゑおかれしかば、いにしへのさまの木にて、花はところどころと咲きたり。見ざりし時思ひしやうにもあらず。やがて隣雲にのぼる。けふはさせる興態もなし。夕つかた普明院宮にまうづ。音羽川を過ぐるほど、せき入るる水を見るべし。今日は池に瀧の音せずとも、この川にたたへたるを見ばやと、かねてせきたれど、わづかなる水の流なり。水上の方を見やれば、いささか高くて、岩間岩間つたひてぞ落ちくる。この川を今は音川とみな人いへども、西坂本の音羽川これなり。いつの頃よりかいひあやまれ



るならむ。

岩つたひおちくるみづのおとはがは今もたえせぬ名にぞながる。（れい）  
普明院宮に謁し申して、林丘寺の客殿にしばらく涼みて、菓子やうのものく  
ひ、やがて壽月觀にかへりぬ。道すがら田面を見渡すに、郭公なきぬといへど  
え聞かず。かたはらなる苗代を見れば、生ひしげりて若苗うるはしく目とど  
まる。

草木にもおなじみどりの色ぞわくなはしろ小田にしげるわかなへ  
そもそもこの山は、むかし一條院の御時永延の頃、勝算といへる公家の沙門、  
一寺をこの山に建立して修學院と號す。夢に不動明王の尊體を見たてまつ  
る。その尊容をみづからきざみて、堂に安置すとなり。今のきららの不動は、そ  
れをうつせるならし。この事をおもひいでて、

たが夢に見し世しのべとこのやまのうごかぬかたちなほ残すらむ。（ま）  
壽月觀にて晚炊の後しばらくありてかへる。京につきぬるは戌のなかばに

もなりにけむかし。

### 享保十年

長月の中の六日、山莊へ例の茸狩にゆく。荒神のまへより野に出でて、この度  
は吉田道をゆけば、なかば行くほどより、いにしへは並木にてありしといふ。  
松とところどころにあり。大きな木ども七本ばかりあるが中に、すぐれたる  
大木二本ぞある。後に聞けば根のまはりにて、一丈六尺にあまれりといふ。木  
だち枝のさま誠に世にすぐれて見ゆ。天正の頃並木に植ゑたる松の、おほく  
は枯れて残りたる木なりと世にはいへど、其頃よりは久しき木にてもある  
べきにや。もしは應仁の亂の後など、並木にうるし木などにもやとおぼゆ。ま  
たは應仁の頃まではそのあたり大寺どももありしかば、その庭などにより  
し木の、兵火にもれて數百年を経たるにもやとおぼゆ。法成寺といへる大  
寺なども、近代あとかたなくて、あまつさへ敷地もみな賀茂川となりて、今は



いづれの所なりといふことを知らず、無念のことなりと、後普光園院攝政の  
いへる事を、あまのもくづといふものにかけり。これは應安のころの人にて、  
應仁よりははるかに久しきことなれど、それにも其跡東の野となれりと見  
ゆれば、これらの類おほかるべし。そこを過ぎて世に二本松といふ、二本なら  
びたる大木あり。これも木立あやしくたぐひなし。そのところにて

杉ならぬこれもとし經てふたもとの名にしおひたる松のこだかさ  
ゆきゆきて吉田の境に入る馬場の道を過ぎて山にのぼる。まづ春日の社の  
前に輿かきすゑさせていささか祈念す。拜殿なれば拜の儀におよばず。そ  
れより八神殿にいたる。道すがら龍澤の池明星水などを見る。かしこにいた  
りて輿より出でて社を拜み、内外宮ふしをがむ。八神殿の破風にたかく額あ  
り。嵯峨天皇の宸翰といへり。しもにあるは後土御門院の御筆の由。二位申  
す。神殿の前に竹と榊とのうてなあり。左右には六十餘花（増）の神を、勸請せる小  
社ならびたり。ここかしこ見めぐりて、また輿にのりて行く。龜の石、鳥の石、虎

の石などいふ小さき石ならべたり。四陣の石なるべし。龍の石といふは見え  
ず。いかがりけむ。春日若宮の社木爪大明神などかたへの山に見つつ、神樂  
岡にのぼれり。やすみ所しつらひ。おきたれば、休幕のうちに輿かきすゑつ。そ  
れより出でてこなたかなたあり。此山より西の山山、ふもとには都をひろ  
く見て、わが古さともこまやかに見ゆるよしを、かねて聞きおきたれば、それ  
をまづ見むと思ひつるに、わりなく朝霧のたちこめて、山のなかばより京は  
見えす。つらなれる山のみぞ見る。ト二位菓子やうのものまうけつれば、それ  
をとりまかなひて食ふ。そのあひだ山山の霧、みねまで立ちのぼりて、西の京  
いささかも見えす。

遠からで見ばやとおもひしふる里をあやなくへだつ今朝のあき霧  
と思ひつづけられたり。そもそもこの山は天上にて八百萬の神達、神樂を奏  
せられし土地の、天くだりてこの山となれり。されば神樂と名づく。

八百よろづ神のつどひしかぐら岡その名をここに聞くもかしこし



さて北ざまにありて、此山にてはすぐれて年ふり大いなる松一本あり、ト二位これは昔如意が嶽に、齋場所のありしとき、此所より遙拜せしによりて、此松の名を遙拜の松と申す。文明の頃よりの木なるよしを申す。げにも三社の詫宣は如意が嶽にて、嵯峨天皇、弘法大師、意美麿、三社神詫をのべしとなり。此松の本にて、後開如意が嶽にしばらく齋場所のありしところなりとト二位申す。

世世ふりぬみつのやしろのかみ慮のべけるみねにむかふ木かげは北のかざりに少し高きところあり。のぼりて見れば麓田面をひろく見わたして、白川村むかひに見えたり。しばらくの後、また南にかへりて山のなかばほどより東にくだる道あり。これはこのたびのれうにつけたる道なり。それをあゆみくだりて、麓に幕はれる中に輿すゑおきたれば、やがて乗りてゆく。銀閣寺の門前を過ぎて、白川山のふもとよりのぼりて、照高院の寺につきぬ。まづ客殿をぞ見る。これはむかし秀吉太閤の聚樂の城にありし殿を、この所にひきたるなり。さればひろびろとして、座敷は墨繪泥引なれど、小壁天井格

子のうちなど、濃き色どりの花などさままかけり、まことにふるめきて鄭寧なるさまどもなり。客殿見わたりのち書院の方を見る。まづちひさき間に白象を書きたり。探幽法印が繪なり。それよりおくにゆけば書院なり。ひろき間二間ぞある。おくの間の繪は山水、うしとらの角にて方一間の上段あり。ぬりしきみ西南にめぐれり。北に床あり。その東に小ぶすまの繪さままなり。次の間はひろし。西の方座敷のよこざまに大床あり。繪許由をかけり。ふすまどもには竹林の七賢なり。これも探幽がゑなり。この書院の前の庭泉水なり。此所にてものくひ盃とりなどす。池の東北の方に瀧おつ。このたきの高さ二丈ばかりもあらむやと見ゆる。その水上を繁りたる楓の木にてつつませたり。池のなかばに板橋をわたせり。その橋かなたは山のすそにて高く、こなたはひきくめづらかなる様なり。其橋をわたりて、細き道を南にいささか行けば、北に向ひて山にのぼる道あり。それをのぼれば水上のかけ樋あり。これを左に見つつ一二町ばかりものぼりぬれば、山のいただきにいたる。熊野三



所の鎮守あり。その所の景趣いとおもしろしいにしへの瀧の跡、咫尺にあり。しろき大石左右をさしはさめる中に、瀧おちたる跡あり。繪にもかきとらまほしき舊跡なり。この白川はいにしへ忠仁公の山莊なり。中務といへる名高き歌よみの女房、その山莊にまうでしをり、女房のざうしにとまりて、白川の瀧のいと見まほしけれ」とよめる後撰集にいりたるをふと思ひ出でて、見まほしとむかしもいひし白かはの瀧にわれさへ今日はむかひて瀧をはさめる石のたたずまひ、世になくおもしろければ、

これもまた絶えていくよの跡ならむたためる石のしらかはのたきとばかりありてふもとにくだる。いささか南にあゆみてまた山にのぼる。一町ばかりのぼりて隣の山のさかひなり。これより淨土寺山なりといふ。それを二町ばかりのぼりて頂にいたる。見わたせば今朝にかはりて、西につらなれる山ども、都の道もよくはれて見ゆ。

行きていつ見るよもあらむ今朝は見ぬみやこも西に向ふやまやま

かくぞ思ひつづけける。淀河もよく見ゆ。赤山にて見しよりは近くて、河のはばもひろくぞ見ゆる。こなたを見れば如意が嶽の北おもてなり。七月十六日にともす大文字左の方のひきすて見ゆ。薪をつむだんだんの石を數ふれば十七見ゆ。二後、石と石との間ありとなり。かくま近く見ることまた珍らかなることどもなり。しばらくの後麓におりて寺にかへる。座敷の繪ども客殿のすゑさままで此度は見る。玄關の右のかたに高き所に窓あり。これを問へば、城にありし時首實檢の窓なりといふ。とかくして今はここを出でなむとて、供奉などもよほす。門を出でて山莊に行きつきしは、ひつじのななめにもなりぬ。壽月觀にかくして隣雲軒にのぼる。その道にて女房あまた出であひたり。是は今朝よりまづ一乗寺にゆきて、松茸とるべきよしをききたれば、今かへり來る折になむありし隣雲にて食ふものとりまかなひて後、また赤山にゆく。今年はいづくの山もたけ少しといへば、ここにもすくなくて、ただすこしばかりをぞとる。



かぞふれば今はいつしかいつとせの秋になりぬるやまのたけがり  
池の汀にまうけたる例の假屋におのおのやすらひて、壽月觀にかへるみち  
すがら思ひつづけし。

まだ行かぬ山またやまのたけがりはいかなる年のあきよりかせむ  
かくて晚炊ののち京にかへる。こよひは山莊を早くいでつれど、晝こしまま  
の白川道なれば、常よりは遠くて、亥の過ぐる頃京にはかへりつきぬる。  
つとめての日はかねてよりの約束にて、一位前大納言、岩倉前大納言、愛宕宰  
相中將、清二位など山莊にまうづべきよしを、かへりて後仰せつかはしたり。  
岩倉の前大納言ばかりは、所勞のよし申してまゐらず。今日は藤谷の前中納  
言、大藏卿隆春朝臣ゆきて案内しもてなすべきよし仰せおきてたり。ひねも  
すかなたこなたを見ありきて、昨日とりのこしおきたる松茸のいささかあ  
るを、すこしづつとれりとなむ。おのおの詩つくり歌よみ俳諧など、さまざま  
興に入りたることにてありしと、夜にいりて聞えし。

九月十七日辱拜明詔始到修學院賦詩

宣 通上

餘香鸞輅軌軌イ

黃菊羽觴傳

臺樹風霜古

塘村樹竹連塘イ 樹イ

倚欄題落葉欄イ

下澗掬飛泉澗イ

偏惜秋陽短

爽氣拂暮煙氣イ

爲 範上

鳳輿臨幸後

秋色正濃時

千尺泉聲咽

四圍風景奇

傍松同採菌松イ

向竹謾題詩竹イ

賜宴誰辭醉

幾操萬歲卮操イ

藤谷中納言藤イ

諸人とともに越えきぬわが君が昨日みゆきのあとのやま道



松だけをすすきにてつらぬきたるを見て

一位前大納言

松茸のかさの緒にせりいとすすき

愛宕前宰相中將

照哉紅葉顔

狂句

一位前大納言

茸驅松自本

狂歌

同

ありがたき昨日（度）の奉書ひらくよりけふの肴（日）をまつだけのかさ  
かくておのおのくれかかるほどに歸りけるとなむ。

享保十年

神無月なかの八日、また例の山莊にもみち見むとてゆく。これはこの春頃上

田の侍従忠周しばらく京にのぼりて、東へくだりしをり、例の老禪尼公より  
大樹へ言傳申させおはして、山莊へ御幸のこといまままで年に二度なれば、對  
面もあまりに稀になることになむ。故院には年にいくたびとなく御幸あり  
しなり。せめては今一度もかすそへまほしき事と、思ひ給ふるよしを、よから  
むついでに申さしめよと仰せやり給ひしかば、このほどまでは何のいなせ  
も申さざりし。此月のはじめつかたにぞかへりごとと申しおこせし。大樹へよ  
きついでに申さしめつれば、高年の宮の御願ひごとといひ、われら養生のた  
よりになりぬべくは、春秋のほか今一度かすそへられよと申さるるよし、  
かへりごと申入れつるほどに、そのおもむきを所司代田邊侍従英成に仰せ  
きかせて、俄にもよほしたるなり。今年も山の紅葉見まほしく、ためらふほど  
に大方さかりは過ぎにけり。中の八日にと仰せさだめぬ。其日になりて、わり  
なく曉方より空いとくもりきて、雨も降りいでぬべければ、いかがせむなど  
いひつれど、此度も二度ばかりのべきつることなれば、いかなどいふほど



に、夜明けてのちいささか晴れぬべき氣色なれば、いざといひて出でたつ、日も短きをりなれば、道によるところもなし。山山の紅葉を見つつ行かばやなど、かねては思ひつるを、はやくさかりは過ぎぬるなるべし。目とまる梢もなくて、ただぬるでの木の、色こく染めたるが、民の家のほとりにあまたあるをぞ見つつ行く。ぬるでといふことを立ちいれたるばかりに、

思ひこし色にそめぬるて、こらさはただこれのみと見つる野邊かな。今日はまづ林丘寺にぞ行く。老禪尼公に謁して、此度のよろこびごと申しかはすついでに、老尼公のよみ給ひたりしとて、歌をかきて見せらる。手跡などもいささかにかはることなく、てうるはし。

幾千たびみゆき待つらむこの山のいまひとしほに染むるもみぢ葉ひととほりよみくだすうちに、硯紙をこひて墨する間におもひつらね、筆をひくやうにしてぞ書きつけてまゐらせし。

今年よりいまひとたびのかす添へて待つらむやまの紅葉をぞ見る

しばらくありて御堂にまゐる。觀世音の御前に禮拜して、懷より一卷をとりいでて法樂す。普門品をこひて讀誦せしめ、二世安樂の願望をなす。

詠普門品和歌歌二行書之

となふなる聲のうちよりくるしひはとけて残らぬ恵かしこきあふぎてもあふげ七のやすからぬ罪を遁るる御名のしるしはひと心みつにそこなふうきわざも身をはなるてふ誓たのもしひたふるに願はば法の力もてもとむることのむなしからじを數あまた保つにおなじ御名なればこの御名ひとつ猶頼めつつさまさまの身を現はして説く法になにかはもれむいける類のあたへにし寶の玉のかざりをぞうけてもやがてまた捧げける舊院の御影の前にまゐりて、禮拜念誦をいたす。

侍 故院御影前述志

さとり見し君がおましと仰ぎ見む上がうへなる蓮のうてなを



かくてまた

哀とやなほみそなはすたらちねの教へし道にいたりえぬ身を  
いまもなほ親のまもりのあひそはば壽のみやせめてつかまし  
この山に十度はきけり行くさきも君が御幸のかずにあへてよ  
この山にあらぬやまやま野邊河邊君が御幸のあとならばや  
かやうの事をも思ひつづけられたれど、御影の前にははばかりて奉らざりし、さ  
て野すぢをあゆみもて行きて、山莊へいたり、池の西をめぐる。このあたりな  
るは皆落葉して見る色もなし、窮途のあたり近きほどにぞ、ちり残りたるも  
まだ染めいでぬも、すこしはある。隣雲にいたりぬれば、軒端なるが一木ぞ今  
さかりに千入染めたる。ここに立てる二木の紅葉は、早くもおそくもわが來  
るたびごとに、色濃く千入の盛を見せて、心のありげなれば、ことに愛賞する  
二木なり。

こころありてをりよく染むるこの庵の軒のもみちば見ぬ秋ぞなき

今日は兩席の懷紙とりかさぬべし。このほどより催し仰せたり所せばくて  
席を設け、披講などの事まではかなはねば略しぬ。詩歌の人人やがてまゐり  
集りぬべけれど、披講にも及ばざれば、あまりに興體なかるべし。散れる紅葉  
をだにひろはせて、參りあつまれる人人にたびてむといふ。とかくするあひ  
だ、都の方くもりきて、山も麓も見えずなりぬる。みやこの時雨を山より見る  
もめづらかなることなれば、なかなかおもしろく、こもとも嵐はげしくぞ  
吹く。

紅葉ちるやまのあらしにこきませてとほきみやこの時雨をぞ見る  
見るがうちに辰巳の方より晴れて、西の方戌亥をかけてぞ山めぐりする。若  
き女房など木のもとごとに紅葉拾はむとするほど、いささかしぐれ來ぬ。さ  
れどしひて笠とるまでにはあらず。女ども隣雲にかへりきて、ひろへるが中  
に色よきをえりて、紅葉をがける紙どもに包みつる。おのおのまゐりつどひ  
ぬといへば、女房はみな林丘寺へつかはして、一位大納言はじめここにめし



て對面す。しばらく物語し、かはらけなどとりて後、おのおのまかでむといふ。  
 ひろはせし紅葉をたびつれば、興にいりて皆皆まかでぬ。さて壽月觀にゆく  
 程やうやうくれ過ぎにければ、松ともさす。壽月觀の庭には今さかりなるも  
 ありといへど、夜なれば見えす。ちひさき枝ををらせて、  
 この庭のもみぢはよるのあまのにしきにて折りこし枝にちしほをぞ見る  
 晩炊などとりまかなひて、とかくするあひだ、宮宮のよみ出でたるとて見せ  
 侍りし。

女 二 宮

洞のうちも山のみそのもこの君のめぐみの露に染むる紅葉ば

林 丘 寺 宮

みゆきする惠のつゆの色深みそめものこさぬやまのもみぢば

一 乘 院 宮

紅葉ばの薄きも交る峯ふもとなほ染めよとや今日しぐるらむ

三首のかへしを一首にてし侍りし 愚 詠

嶺ふもと(宮句)染むるもみぢ(女)ば(宮)色深み(宮)深き(林)

今ひとたびもきつつ見ましを

かくて後京にはかへりつきし。

賦 山 皆 紅 葉 詩 紅字用

(公 通 作 歎)

秋後重來古洞中

臺峯兩脚野村東

滿山一樣霜楓樹

蜀錦千株織得紅

詠 山 皆 紅 葉 和 歌

(光 榮 作 歎)

かす知らぬ千しほの梢かさねあげて紅葉ぞ山をなべて染めける

山 皆 紅 葉 紅字用

正二位藤原韶光

山光尙訝曉露濃

池影翻疑夕日紅

喜見仙輿將駐驛

天園楓錦作帷宮

正二位源乘具



臺峰壽色擁離宮  
想得山靈開錦帷

楓樹松杉綠映紅  
宸遊歲歲祝無窮

權中納言菅原長義

千里雲晴圖畫中  
前溪後嶺楓如錦

侍臣從輦侍離宮  
日射赤山山更紅

大藏卿菅原為範

霜染滿山千樹楓  
醉持一朵歸家去

浴恩清宴侍離宮  
榮比昔人畫錦江

正二位源通晴

鸞輿靜轉向離宮  
此日山虛如有意

鸞鸞行行入邃洞  
萬峯楓葉一時紅

從二位清原宣通

金輿此日賞丹楓

青女天機織得紅

眺望風光如有待

玉欄映對滿山紅

正三位藤原實岑

山頭山下又山中  
今日侍臣齊衣錦

葉葉株株染一同  
看來恩露潤深紅

從三位藤原實積

仙路玉鑾穿錦楓  
滿山草樹承恩露

駐旌賜宴幔城中  
萬壑千峰一樣紅

從三位藤原氏敦

滿山霜葉照瓊宮  
雨露殊深臨幸地

扈蹕辱從天仗中  
故添光彩傲鮮紅

權右中辨藤原光潔

侍宴共看霜後楓  
枝枝爛漫最難畫

染成東嶺映離宮  
須比彩霞與錦紅



題者 冷泉中納言  
奉行 大藏卿

山皆紅葉

尊 昭

今よりのみゆきはいくよこの山の木木の紅葉の数もかざらじ

正二位源通躬

名にもその立田はしらすこの山の木ごとの紅葉そめて色こき

按察使藤原俊清

この山にみゆき待ち得し今日とてや残る木木なく染むる紅葉ば

正二位藤原基長

よの秋もこの山のみと木木にみて色より色をわくるもみちば

正二位藤原實陰

もみちばは重なる山のみねかけておほふさかりの錦とやみむ

從二位藤原兼親

常磐木の交るもみえず山はみなひとつにそむる秋のもみちば

權中納言藤原爲久

草も木もをりはへそむる山姫の錦をけふのおましにやしく

權中納言藤原公福

ことさらに今日はよそほふ色みせて山を錦につつむもみちば

正二位源有藤

待ちつけの今一度のみゆきとや山の紅葉もそめつくすらむ

從二位藤原爲信

ふもとまでなべてそめけり大比叡につづくおまへの山の紅葉ば

從二位源通夏

からやまと交る言葉の色そへて山はみながらそむるもみちば

從二位藤原師香



けふもまたみゆきあればこの山はなべて紅葉の色をそへけり

正三位藤原益通

いくもとぞかげ奥深き峯ふもとめぐりかさなる枝のくれなる

正三位源惟永

みねふもとなべて紅葉のから錦おりかくいろぞ松もまじらず

從三位藤原公野

露しぐれそめものこさず紅葉ばの錦をやまのたてぬきにして

左近衛權中將藤原隆春

花よりもみゆきの車とどめえてめぐるやよもの山の紅葉ば

題者奉行等 冷泉中納言

文人

一位大納言公通 勘解由小路前大納言韶光

岩倉前大納言乗具 菅中納言長義

大藏卿爲範

愛宕前宰相通晴

清二位宣通

押小路三位實岑

風早三位實積

櫻井三位氏敦

權右中辨光潔

端作書様不<sub>二</sub>一樣<sub>一</sub>大概闕字或無<sub>二</sub>闕字<sub>一</sub>。

冬日 或陪大概如此 侍修學院離宮同賦

歌人

一乘院宮尊昭

前源大納言通躬

按察使俊清

東園前大納言基長

武者小路前大納言實陰

中山前大納言兼親

冷泉中納言爲久

三條中納言公福

六條前中納言有藤

藤谷前中納言爲信

前源宰相通夏

石山前宰相師香



六角三位益通

源三位惟永

武者小路三位公野

四條中將隆春

烏丸大納言兼一依所勞不參不獻懷紙

端作書様

侍修學院離宮詠沙門尊昭

冬日陪大概如此修學院離宮同詠各無闕字

或初冬 或侍

享保十一年

卯月の末の六日、例の山莊にとてゆく。一昨日までは日毎に曇りがちにて、はれをいかがと思ひつるに、昨日朝より心よく晴れわたりて、よべも星はかすなく輝けり。しばらくいねて起出でたれば、やがてほのぼのと明けわたる。いづつよりもこころよく晴れたる空の氣色なり。かねては日出に門を出づべき

よし仰せおきたれど、あまり心よき晴にもよほされて、今すこし早く出づべきよしをいひて、供奉の輩をいそがす。朝餉したためなどして、とかくするほどに皆そろひぬといへば門を出づ。清和院の門を出でてのち日は出でたり。出町といふところより野に出でてほどなく、まづ下賀茂にいたりぬ。去年の例にまかせて、河内の社の前に輿かきす。ゑぬやがて出でて拜殿にいささかのぼりて心念す。社の右に一社あり、とへば貴舟の社なりと申す。これもいささか心念す。雑人はらひぬといへば、それより出でて廣き芝をあゆむ。ここかしこ去年見のこしたることども、尋ね聞きて見もてゆく。本社にいたりて、しばらく祓くり祝詞など例の如し。されどわざと神事をかまふるにあらざれば、うるはしく拜の儀には及ばず。ただ心念のさまなり。社邊かなたこなた見まはりて樓門を出づ。かねてひそかに仰せおきつれば、あづちの北に楊弓射るべき所まうけおきたり。ところのさまよりはじめ珍しく、なみゐて射る。十度ばかりにやあらむ。度をとるまでもなし。各あたりかねたるうち、石山前宰



相五本、つぎに予三本、風早三位二本、東園前大納言、桑原前中納言、四條中將のおの一本あたれり。清水谷大納言は一本もあたらざりければ、皆わらひて立ちぬまことに所がらめづらかなる遊、ことさら面白かりけり。非藏人に仰せて魚をつらせて見れどえつらす、こなたかなたして同じ杜のかたはら、つねに社家どもなどに鞠ける場をとひて、そこに各まりを蹴る。竹内民部權大輔一人は、いささか蹴なれたるさまなり、その外はすぐれたる下足なれば、いささかもあたらず。しばらくの後、そのところをさりて、河邊にまうけたるやすみ所にて、菓子かれいひなど皆皆食ふ。このあひだおもひつづけし。またもきてすすみとらばや泉が水いさぎよきもりの木かげに、いづみ河かはべの鳥居けふもまたあかでほどふる森のしたかげ

東園前大納言

君まもる神の心もけふくみて名さへいづみの清きかはづら

清水谷前大納言

君もなほあかじな清き泉河いくたびここにみゆきありとも

發句

桑原前中納言

なげやなげ夏をただすの時鳥

石山前宰相

この森やいまにも聞かむ時鳥

六條中將

いづみ河見るに流のそこすみてくむも涼しき水のしらなみ

四條中將

木木の色のみどり涼しき泉川いくよの影をうつしてかすむ

俳諧發句

涼しげの御神酒かここに泉川

風早三位

狂歌

きこしめす御膳の酒もいづみがはこの下かもを御肴にして

同

桑原前中納言

元陵御記上卷

四七五



たべゑひて我れのみ色にいづみ川ただす顔なる杜（たけ）のあをさよ  
かうやうの事ともいひて、河邊を南にむきて行く。高野川の前に幕をはりま  
うけたれば、その所にしばらくやすらひて、おのおの盃とるとかくして輿に  
のりて行く。道にはしろの早苗をこなたかなたに見る。

ここかしこ見るいろ涼しまだとらぬなはしろ小田にしげる早苗は  
やうやう行くほどに、ひばりのこゑを聞きて、

そことなき野原のそらになくひばりところがらにぞ珍（たけ）らしと聞く

山莊にゆきつきぬれば、巳のなかばに過ぎぬといふ。郭公は鳴きつやと問へ  
ば、今朝よりま近くしげく鳴きぬれど、やうやう日たけぬるゆゑにや、今はま  
どほになりぬと申す。聞かばやと思へと鳴かず。

いく年か聞かで過ぎにしほととぎす今日この山のかひになかなむ  
山蟬ぞしげくなく。

いかで今日山ほととぎすやませみのひまなき聲にかへて聞かばや

すゑものづくりするたくみを召しおきたれば、みすおろして、繪かき轆轤に  
てさまさまの形しいづるを見る。このころ烏丸太納言、三條中納言、武者小路  
三位などまわりしをり、すゑものづくりするを見しことありやと尋ねしに、  
見しことなきよしを申ししかば、今日山莊にまゐるべきよし仰せて、おのお  
のまゐれり。烏丸以下按察使、その外供奉の輩、非藏人まで見物す。東園石山は  
下賀茂より京にかへりて留守に候す。風早もかへりぬ。繪かきたる器を庭竈  
にいられて焼く。これもやや久しくありてとり出でぬ。さてそのしつらひをあ  
らためて後、かれいひ食ふ。まぢかき高野川にてとらせし年魚もてきぬとい  
へば、やがて調せさせて食ふ。その後烏丸已下按察使をはじめおのおの前に  
めして、十五首の題をさぐりとる。しばらく言語の後、一乗寺竹門の寺見すべ  
しとてやる。明宮、烏丸坊城、三條、武者小路などなり。そのあひだ女二宮、林丘寺  
宮女中おのおのいざなひて、うへなる茶屋にゆく。道のほどにて郭公鳴きぬ  
といへば、耳をそばだてて聞くに、ことにさだかなる音二聲ばかり聞えたり。



八九年のほど聞かざりしかば、はなやかにおもしろきこと限なし。後に聞く、この時鳥の聲この山のほとりに聞えずとぞむわが幸なりしことなり。

待ちえたる今の初音のうれしさにかつはおどろくほととぎすかな  
よろこびて行くほどに、また鳴けば、足をとどめて聞く。かくすることたびたびになりぬ。五聲ばかり聞きつ。

ほととぎすいく聲なきついくたびか行きやらで聞くけふの山みちまに  
隣雲に行きいたりしてしばしやすらふ。のち林丘寺にゆく。その道にすゑもの  
づくり焼きたつる竈、此頃まうけたるを見る。これも珍らし。行きつきて老禪  
尼の宮に調し申すほど、くれ過ぎになれば、燈燭をまうけたり。つぎなる間に  
茶を炮するほいろといふものあり。めづらしからむ。見るべしやとあれば、行  
きて見る。敷紙の上に茶の葉をおほくおきたり。敷紙をあげて見する。一間あ  
まりに割りたる竹を格子にあみてゐるりにのせたり。ゐるりのうちまはり  
に、大なる炭をかさねかけかさねかけおきたり。めづらしと見る。炭をおこし

て後、茶の葉をうちかへしうちかへしいく度もして炮することなりといふ。  
しばらく見て後、老禪尼のおはするところに歸りて、やがてまかり申してた  
ちぬ。このたびも野筋をかへりきて、壽月觀にておのおの晩炊をしたむ。供  
奉をもよほしたてて、山莊を出でたるは、戌のなかばすぐるほどにやありけ  
む。京にかへりつきぬれば、夜半の鐘聲もはやなり過ぎぬといふ。

十五首和歌

出願冷泉中納言今日不登の輩は意趣いひつ  
かはしてさぐりとるよき日もの清書

山新樹

實 陰

若葉こそこころは染むれ花は過ぎ紅葉は遠き山のみどりに

垣卯花

公 福

めづらしと君は見るらし山がつの垣根に布をさらす卯の花

尋郭公

雅 季

世にはまだ忍ぶ初音も尋ねいる君にやもらす山ほととぎす

遠郭公

有 起



今日爰にまつかひありて時鳥はるかに聞くもあかぬひと聲

近郭公

光

榮

心ありてただここにもや名のるらむ今日の御幸のやま郭公

夕早苗

爲

信

賤の女かこやくれゆく空を惜むらむとりも盡さぬ小田の早苗に

河夏月

長

義

見るままに水の流も月影もきよくすすしきなつのかはづら

野夏草

爲

久

露もまだ深からぬ野の夏草は行きかふ袖にさはるともなし

橋邊螢

俊

清

せき入るる御池のはしの下水に螢とびかふかげのすすしき

樹蔭蟬

隆

春

夏ふかきこの下蔭の夕風につゆもみだるるせみのこゑごゑ

夏契戀

通

夏

身にはまだかさぬる夜はも夏衣うらなくちぎる情ばかりに

夏顯戀

有

藤

いかなればかけて忍おもひびしわが中のあふひてふ名を世に洩しけむ

夏恨戀

公

野

あくるまで叩く水鶏の横の戸にこぬ夜恨むる音なきもや添へまし

夏夜夢

實

岑

涼みとるうたたねながら明くる夜に見るまも夏の手枕の夢

夏眺望

愚

詠

野も山も夏はみどりのひとつ色につづく眺の末ぞはてなき

舊院この山莊を經營ありて、はじめて御幸し給ひしは、明暦元年六十歳にな  
らせ給ひし時なり。寛文十年の頃までは、年にあるは二三度、あるは四五度の



御幸にてありし、寛文十一年七十七歳の御時、年中に九度御幸し給ひし、それより年ごとにあまたたびの御幸にてありし、日記にくはしく見えたり、我も今四とせばかりにて七十七歳に及ぶ、いかで舊院の佳例のままにならばやと思ふのみ、されどそのをりは、東福門院ともなひ給ふをりばかり、諸司代供奉せしめ、舊院のみ御幸のをりは、諸司代も供奉せしめず、辻がためなどいふ事もなく、すべての行粧もなかりしなり、然れば今は年にあまたたびといふ事は、決してならざる時節なるべし、いかがはせむ。

享保十一年

此秋も茸がりにと思ひ立ちにしころ、伏見の宮わづらひ重くなりぬるよしなれば、その事にまぎれくらすほどに、茸狩に行くべくもあらで、月日をおくるに、いつしか神無月も過ぎぬ、霜月になるほど、紅葉さかりのよしなれば、やうやうもよほしたてて、はじめの二日といふに例の山莊に行く、野に出づる

ほど、朝霧深くたちて、山山も見えわかで、しばし行くに鹿が谷の方霧の絶間に見えて、山のなかばより麓まで、紅の錦を引きはへたるやうに染めたり、しばらく輿をとどめてながめある、光潔朝臣輿の右にありて、絶句のかみの二句はおもひよりつれど、三四句いまだつくり得ぬよしを申す、せめて問ひきけば、おもしろく興ある作なり、いかで末をつがむとおもひて、しばらくありてふと思ひよれるほどに、いひきかせなどして行く、四方の山山さぞ染めつらむとゆかしければ、

むかし聞く小倉の山のためしにもまたすやわれを四方のもみちばことしはと思ひおもひていくあきの紅葉をよそにむかふやまやまもみちばも行き見て見ぬとや朝ざりのよその山べは立ちへだつらむなほゆくに霧いと深くて、音羽山も近くなりぬれど、紅葉はたちこめて見えす。

目に近くむかふおとはの紅葉さへさだかには見すきりふかくして



かくて山莊に行きつきぬ、壽月觀の前なる一木二木ぞさかりなる。

これをだに見よとや染めし山ふかき霧のしたなるにはのみぢばやがていつもの道を行きて池のほとりに出づ。今さかりなるはすこしばかりぞある。

染むるてふ名にのみいまだ色くちぬ霜降りづきのもみぢをぞ見る  
音羽山にむかへる休幕にいたりて見れど、霧たちこめてなほ見えず、もみぢ見にやどれるわれと知らねばやさほの河霧立ちへだつらむといふる歌を思ひいでて、口すさびゆく。さて隣雲にいたりて見れば、秋毎にめでこし軒端の一本ぞ、心ありげに今ぞさかりなる。

去年よりも今年に染めてもみぢばにけふこし山のかひもあるかな  
かれいひなど催したたむる間に、日影いとうるはしく晴れたり。さきのやす幕にまた行きて、おとは山の紅葉をぞ見る。いささかさかり過ぎたれば、見て過ぎし霧まはよそのもみぢばに晴れてまぢかくむかふ峯かな

赤山の社にまうづべしとて出でだつ申のなかばにもやなりぬらむ。池の汀を北さまにゆけば、池にはをし鳥多く浮びて遊ぶ。遠つかたの水にのぞめる梢より、をし鳥の飛びおちて浮べるも、まだ見ぬことと珍しくぞおぼゆる。  
おのが友あそぶみぢはを見るが内にこすゑのをしもおりて浮べる  
これを見つつ行けば、道のほとり近き汀の高からぬ木の冬枯したる枝に、ねぶれるをしの二つがひありて、人になれたるさまなり。

落葉せし枝のをしどりとおどろかでねぶるを見るもあかぬみちのべ  
赤山に立願の事心念の後、壽月觀にかへりぬれば、けさの絶句の和韻上の二句、實岑の卿供奉にありてたてまつる。三四句の和韻一乘院宮くはふ。

錦穿千樹霧

袂拂百畝霜

光潔朝臣

髣髴不看景

晴疑行路長

恐作

和韻

雲霧朔風靜

池心寒自霜

實岑卿



霜楓催<sub>レ</sub>醉處

向<sub>レ</sub>夕興彌長

一乘院宮

晚炊の後しばらくふかして京にかへりぬ。

享保十一年

今年は春頃山莊のやねども葺きかふべきよしを諸司代申しおこなふことありて、とかく沙汰せしむるあひだに卯月も過ぎぬ。五月になりては雨などしばしば曇りがちにて、思ひたつべき雲間もなく、あつささへ早くいたりぬれば、道のほどいかげあらむなどいひて、さらば秋になりて催すべきよしを仰せおきてぬ。八月になるまで、残る暑さ常の年よりも久しくて、長月にさへなりぬれば、松茸いづこにも出づといふいでや催したてむとて、九日に行くべきとさだめ仰す。この頃は晴うちつづきたるなかに、八日の日はことによく晴れたり。夜になりて早く寝ぬべしなど思ひいふほどに、寺のそや聞ゆ。明けぬまにあすは起き出でむ今宵とくねよとの鐘の聲にまかせて

その後まどろみたるに、故院を夢に見奉りて、さめてのち思ひつづけし。

三度見しそれだに世にはあやしきをまた數そふるゆめのうれしさ  
 曉ふかく起出でぬれば、空なほよく晴れて、雲一點もなし。いつも晴を祈ること、験者どもへ仰せつかはすことなり。このたびは事多きにまぎれ、そのこともなかりしに、かくこころよく晴れぬれば、

あふぐぞよ祈らずとてもとばかりのまことを見するけふのおほ空  
 朝とく門を出でてゆく。すすめの森を過ぐとて、

珍らしなす<sup>く</sup>すめのもりをわけいでて山田にかかるあせのほそみち  
 山莊にいたりて松茸をとる。今年はずくなく出でて、とりはやすほどもなし。

十あまり三たびきにけり繪にかける鳥かはあやなおなじとところに  
 隣雲にのぼりぬれば、例のもみちやうやう染めいだしたるを見て、

今日はまた軒の紅葉のした染めにまたもきて見むさかりをぞ待つ  
 林丘寺に行きて老禪尼に謁し申し、庭の紅葉を見て、



四方に名の高雄のもみぢ種とりて植ゑしやここにまだき染めぬる  
隣雲にかへりてしばらく月を見る。

みやこをば出でてこそ見れ目に近き野やまにはるる長づきのかげ  
南旅松<sup>撫</sup>捧月など章句をいひてかへりぬ、鷄鳴のころなり、今日のともにより  
てよめる歌。

爲 信 卿

今日見るはまだ初もみぢ色深く染めてやまたの御幸待つらむ

同

たまさかに君がわけこしかひありてやま路の日かげ紅ぞ濃き

爲 久 卿

はつ紅葉秋のおくあるやまもとに朝立つ霧のいろぞこぶかき

同

長月の今日のみゆきにあふ菊も山路<sup>はぐ</sup>のあきの千世ちぎるらし

同

ふりにけりこれもいつよりたつ袖の麓をしめし仙人のやど

俊 清 卿

御幸をも待ちえし山の紅葉ばにそふる言葉も色ふかくして

この歌は諸司代牧野佐渡守よみたるとして、附の武家大久保備前守、坊城へ見  
せける歌に、

霧はれて嶺よりみねの色ふかみ御幸まつらし山のもみぢば  
とありし返歌によめるとて見せしなり。

長 義 卿

ことさらに君もめづらむ色<sup>しん</sup>深く見し言の葉に染めし紅葉は  
これもおなじく返歌のこころによめるなるべし。

享保十二年



神無月二日普明院宮わづらひ給ふをとぶらはむとて行く。しののめの程に門を出づ。しばらく道を行くほどありて、やうやう日の出づべき氣色はあれど、いまだ出づべくもあらず。見もて行くに、日はいまだ出でざるほどに、大比叡の頂ばかりぞ日のうつろへる見えておもしろし。山のあなたには出でたれど、いまだ見えざるに、高山なれば早く日の影見ゆるをながめつつゆく。なほゆくゆく出でむとする氣色は、あまたの峯にいくそたび見ゆれど、こなたの高き山どもにさはりて出でず。大比叡を見れば、峯にばかり見し日影、やうやうくだりて後見れば、西の山どもには日のうつろへる影見えてきらきらす。西なる山は日のいでがてにする東の山よりは高きにやあらむ、ひがしの山はここにま近きゆゑにやあらむなどおぼゆ。

大ひえやまたはにしなるやまの端に見えていづるはおそき日の影などいひすてて行く。さがり松の休所にいたりて、おのおの盃とりなどするほどにぞ、やうやう日はいでたる。大比叡の日影おほくさがりて後にぞ日は

出でたる。しばらくありて出でてゆく。今日はいささか南によりたる道なれど、これも一度見つる所なればめづらしげなし。道すがら思ひつづけられしことども、

七とせにとをといひつつ四度きぬいつまでおなじ野やまをか見むめづらしき野山なりせば晴るる日の今日いかばかり嬉しからましたのますよ四方の野山にたちねのあとある御幸身はよそにして山莊にいたりて、例のごとくまづ上なる隣雲にゆく。この度はいつよりもあゆみわづらひて思ひつづけし。

今もややあゆみになやむ老が身のまだ見ぬ野やまいかでわけ見むいささかまうけたる休所にいたる。今朝の道すがらつらねたることを書きつく。

東嶺未<sub>レ</sub>看<sub>レ</sub>日

西山影早麗

南疇非<sub>レ</sub>路遠<sub>一</sub>

北麓到何遲



和韻せよと侍醫の者どもの中へ仰せつれば、書きつけてみせし。

離宮新宵後

紅葉似花麗

御宴悠悠處

興如春日遲

隣雲軒へいたり見れば、例の一木ぞよくもみちしたる。

こころあれや遅きもときもあるが中に軒の紅葉ばいまさかりにて

夕日さすのきにかがやくもみち葉はまばゆきばかり色のてこらさ

また松の木のみに見ゆる一木あり。

春ならであきこそいろもまさりけれもみちにまじる松のみどりは

今日はをし鳥おほく池におりゐたるを、

すだきみぎゐるみぎはの鴛はもたらす八十七ともいふばかりにて

林丘寺にゆきて普明院の宮の病體を見る、此度はふしながら調したまふに

こやかにゑみてとぶらひまうできつるを、よろこび給ふけしきなれども

ものたまはず、かぎりなるべきさまなり、涙をうけてたちぬ、山莊にかへりき

て、しばらくありて京にかへりぬ。

享保十三年

今年は睦月のはじめ、おもひかけざること出できぬ、この十とせばあまりしかりこころざし深くあはれと思ひつる女に、死別のことありて、今まで老をなぐさめきつることぐさ、みな夢になりぬる事をのみ、朝夕なげきかなしみて、念誦誦經のいとまには、ただ涙にひちてあかしくらすほどに、食などもおとろへ、身もほろびぬべくあるを、さぶらふ人もなげき日をおくるほどに、男のさぶらふ人人もきく、ことには中院前内府、中山前大納言などつたへ聞きて、さのみにてはあるまじき事といひ、とかくするほどに所司代なども傳へききて、いかがはせむともてわづらひて、野山を見るにはしかじ、例の山莊にゆき、白川などにも行くべきよしを申せども、え思ひもたたであるを、たびたびしきりて申せば、さのみいなびがたくて、二月十一日に例の山莊にゆく道すがら



下御靈社に輿をよせて神前に祈念し、しばらくありて修學院に行く、されど  
 壽月觀例のところ、輿をもよせば、こぞの秋までめしぐしたりつるをりの  
 俛、いとど立ちむかひ、えたふまじければ、山のうへなる窮途といふところに、  
 輿をよすべきよしを仰せぬ。池の西を輿にて行けば、池におりゐるをし鳥、い  
 つよりもおほけれど、こころもとまらずして過ぎぬ。しばらく窮途にありて、  
 さのみはとて隣雲にあゆみ行けど、足もよわく、こぞのをりまでありし俛、こ  
 こかしこに立ちむかひ、ただ涙をのみもよほすほどに、やがて隣雲より輿に  
 のりて白川にゆきぬ。ここにも池のめぐりやうやうにあゆめど、山の上な  
 る瀧のあたりまではえのぼらず、山の上の瀧いまだ見ぬともがらをやりて  
 見せつれば、みなみな一首のうたをよむほどに、かきつけ侍りぬ。

今ここにおつるをめぐる瀧の上の山には名のみ残るいはがね

中院前内府

ここにきてありしを聞けば、みまほしき昔(のい)は(ま)さぞと白川のたき

三條大納言

今日ぞ見る瀧のしらいと白川のこころも名に聞く洞のみぎり

烏丸大納言

幾千世のこゑそひけりなく、かへしみゆきも絶えぬ瀧の白絲

久世前中納言

見まほしといひけむ瀧か、今も名のながれてたかき白川のやま

藤谷前中納言

わが君が千世いくかへりくりかへし御幸待ちみよ白川のたき

武者小路三位

白川の瀧のしらたまかぎりなき數はみゆきの千世をかぞへむ

またある所より初櫻の枝を見せしかば

愚詠

みやこにて見む色香かは山里の春めづらしきはつざくら(か)ばな



久世前中納言

君にとて手折りし枝の初ざくらこころの色もあさからず見む

藤谷前中納言

山櫻けふのためとや咲き出でて手折だせにやせむにせむはなのひとえだ

かうやうのことにて、今日ははやく京にかへりぬ。

享保十三年

卯月十一日人人にもよほされて修學院に行く。けふはまづ下賀茂にゆきて、しばらくして山端村をとほり、松が崎と難波山との間、高野川の川邊に休所をしつらひたれば、そこに行きてしばらくここかしこを見る。千石岩といふを人のをしふれば見るに、それよりも高くおほきなる岩どもあまた、山のほしにあるぞめづらしく見物なる。

めづらしな嶺まで高くたたみなすいはほは名あるいはよりもけに

など歌のやうにもあらぬことなどいひて、小野の橋のあたりまでゆきて見る。そのみちより比叡の山の相輪塔を見る。とほめがねにて見れば、ふとくふもとにてくて二間ばかりの高さに見ゆ。休所にかへれば、網などまうけたるよしいふほどに、うたせて見る。魚はいささかかかれり。しばらくありて放ちやり、夕つかたになりて林丘寺にゆき、夜に入りて後京にかへりぬ。



天皇元元 陵御記 下卷

享保十三年

享保十あまり三の年なかの秋にもなりぬれば、例の山莊へゆかむ事をもよほす。一とせ下賀茂へ行きそめつる後は、上賀茂へ行きみまほしき事を、年月いひわたりつれど、時いたらずして五年六年經にけるを、此度は殊更に思ひたちて諸司代に尋ねこころみさせつれば、心にまかすべきよしを領掌申けるほどに、よろこび思ひて、さらばとく出でて、まづ上賀茂へ詣でて社參をとげ、御ぞろ池松が崎をへて、山莊へはただしばし立寄るべきを仰す。晚炊は松が崎の麓高野の河邊にて、取りまかなふべきよしを、諸司代申さしむる程に、よからむ事ぞと、さ様におきてたり。二十日あまり五日といふに、夜深く出で



て正親町を北へ行き土堤にのぼる。曉方なれば、寺寺の鐘もなり、所所に鳥の八こゑをも聞きてゆく。土堤をなかばよりおほく過ぎぬる程に、夜もやうやう明けぬれば、たい松をけし、土堤のほど、東は藪たかく繁りたるが、夜明けぬるところのほどより、所所竹もまばらにて、東山などをも見る。むかひに一村しがりたるは流木の杜なりといふ。

なかば行く堤をとほみあくるよにむかふは名にも流木の森

西の方は寺寺の後の藪繁りてつづきたり。夜明けて後みわたす所に、藪の<sup>た</sup>だえありて、寺のいらかぞ見ゆる。かれは觀喜寺にて有るべしと、しきりに思ひいづる事むねいたけれど、けふは社參すべしとて、神事を構へつれば、心に思ふ事もえとなへずして、

われもけふいむとていはぬ事をのみこころにおきて向ふひとかた

昔選子内親王の齋院にて居給ひし時、思へどもいむとていはぬ事なれば、そなたにむきてねをのみぞなくと、よみ給へるふるごとを思ひ出でてなむ。賀

茂近くなりぬれば、土堤の藪もまた繁り、西も藪あつくしげらせていづこも見えず。土堤をくだりてちひさき橋を渡る。ここははや賀茂へ入るところなり。在家のある、かたはらに見つつ行けば、二の鳥居にいたりぬ。此所に幕を引渡したり。其幕の内に乗輿をすゑさせて出づ。廣き芝に道作りおきたるをあゆみ行く。高く繁りたる木ども左右に見る。玉垣などまことに神神しく見渡されて、清淨なる靈地なり。玉橋をわたりて樓門を入り、まづかたはらに手洗ひ口すすぎて、神前の板敷にのぼる。ちひさき帖を構へたれば、兩段再拜の後、其座へつく。まづ懷中より法樂の歌を取出でてよみ申す。

侍賀茂社奉法樂十二首和歌

春三首

神山

神山のあたりにぎはふをりはへて花もかげそふはるの白ゆふ（た）

片岡杜



聲はなほかすみをわけて鳴くきじのありかもしるき片岡の森

太田池

花もさらこまじに太田の池のかきつばたへだてぬ陰や敷をそふらむ

夏三首

賀茂山

薄くこくしげる若葉にかも山のみどりもなつはまさる木深さ

日影山

山の名も日影のひに向ふあふひ草ところがらにや生ひはじめけむ

御手洗川

みたらしの河邊涼しくみそぎして早くもなつをこゆる白なみ

秋三首

齋院

今は野に咲く百くさや植ゑてみしいつきの宮の秋をこふらむ

有巢川

秋を経てかれぬちぎりやありす川木だかきかげの松むしの聲

瀬見小川

あひにあひてさざれ行く水いさぎよくせみの小川に月宿る影

冬三首

賀茂川

行きかへる河原りの千鳥おのれさへかもの瑞垣八千代とや鳴く

御所生野

跡とめて今も見えてしかみあれ野に霜おく冬もありしまつりを

賀茂社

つきもせじ守るめぐみをまつの雪のかものやしろにつもる萬代

よみをはりて懐中の後祝祠心念せしめ座を立ちて樓門を出づ社のさまを



見て心もいとことさらにいさぎよくなりぬ。そのわたりせみの小川などみめぐりて、拜殿の歌仙などを見る。故幸仁親王の筆なり。うるはしくぞかかれたる。さて寶殿にのぼる。菓子かれいひなどもてくべきを、いまだもてこで、おのおのさうざうしげなれば、各からやまとの歌たてまつれといひて、俄に十五首の題をくみて、おのおのさぐる。いささか人の數たらねば、京に人やらせ、中院前内府、武者小路大納言、鳥丸大納言、冷泉中納言に一首宛題をたぶ。其後皆漸漸に風情をめぐらし、詠草したたむるもあるほどに、くふべきものもてきぬといふ。さらばとて物くひ盃とりなどす。細殿のむかひにはしどのあり。其前に土の屋あり。橋殿の下を流るる水、細殿の前を行く。六月祓はいづこのほどにてつとむるやとはすれば、橋殿にてつとむるといふ。五十串たつる河邊はいづこの程ぞとへば、昔は河邊に五十串たつる事ありつれど、近代はそのこと絶えしといふ。再興あらまほしきことにこそ。

五十串をも河邊にたててせしみそぎ今もさこそと思ひしをはや

細殿の前に玉垣あり。出入する道もあり。競馬の場も左右に石をならべおきたれば、其所いちじるし。勝負の木は若木にて高からず。近き頃迄はふる木にてありつれど、枯れたる故、近年植替へたるよしを申す。昔後水尾院東福門院同道ましまして長谷へ御幸の時、ここを幸路にてしばらくよりおはしまして、競馬を臨時にさせられて御覽せられしことありと傳へ聞けば、此細殿を御物見の所なりけむ。よき所なり。をりもあらばここに臨時の競馬見まほしき事など言ひて、ここは立ちぬ。まづ片岡の社にまうでて心念をしつつ、其あたりを見れば、おほきなる榎の木のうちきねことごとしきなどを見つつ、ここかしこ末社あまねく心念せしめつつ過ぐる。神宮寺の池の汀に立てる松など、横ざまにそびえて面白し。此池冬はをしどりなど來るといふ。寺のうちを見れば、座しきに居ながら池を見る様に構へたり。庭はせまければ、土堤をつきてひきくこみかきを上げらせたり。聖眞寺をも見る。これも土堤ひきくして、競馬をゐながら見る様に拵へたり。されど今は警固の武士此所に居て



見物するゆゑ、外なる者はここにきて見る事を制すといふ。それより休み所にいたりぬれば、京にやらせし文のかへりごとどももてきぬ。各領掌申す。其中に武者小路大納言は則ち詠草したため、ふばこに入添へてこしぬ。いちはやき事と披き見るに、ことによりき歌なり。いと興あり。おのおのに見せて一同に感歎せしむ。秋橋といふ題なり。しばらく休幕にゐて、また本社のをたりをめぐりて瀬見の小川を見る。まことにいさぎよき流なり。そのわたりの小社に詣でて、それより西の河邊を見むとて、松原をあなたに行きて眺望せしむ。西賀茂、靈源寺、聖大寺（天イ）の山、醍醐大納言領地の山などまぢかく見ゆ。それよりまた東の河邊に行き、二股なる大木の杉、音なし河などを見つつ、さらば蟻が池を見むとて案内さすとへば八町許もあらむといふ。興にのりて行くべしと皆いへど、なるべきほどはあゆみて行かむといひて行く。その道を少し行きて、右の方に行くべき道あり。三四町行けば御旅所ありといふ。林の中を四町許行く。旅所といふ所、今は一壇ばかりありて、其内に注連を四方に引きた

り。其なか二三間四方程にて、草たかく生ひて霜がれたり。しめひきたるさまなどは神神しけれど、其外見る事なし。はじめの道を四町許かへりては、はじめの道に出づ。それよりまた林の中を八町許行き、ありが池へ行く道あり。六町許行きて右の方に壇のつつじの處あり。草高くしげりてつつじの木もみえず。そのわたりをすべて壇といふよしなり。昔齋院の居給ひし所一段高き所にて、その所を今はだんといふにや。御旅所といふところ、則ちみあれともいふとなり。是も齋院の舗地のうちなるべきにや。だんのつつじの所を過ぎて二三町行けばありが池なり。池のほとりまでの道はしるく見えければ、こなたより遠く池を見る。池の方に向へば左の方に堤長く續きて、其わたり山つらなれり。いづくの山ぞとへば、是も賀茂山なりといふ。爰もうちはれたる所なれど、させる景はなし。暫くしてもとの道をかへりぬ。杖などはつかずしてやすみ所にかへる。日もたけぬといへば、二の鳥居のうちにて、また興にのりて出づ。まづ太田の社に詣づ。此鳥居の外には間近く雑人集り居つるほど



に、此道は近けれどあゆまず。社の前いとせばけれども、輿をいささかよこたへて心念す。池の杜若二十間許もやあらむ、つづきて生ひたり。花も二つ三つばかりあり。それより社司どもの家の前を過ぎて、はるかに行く。野に出づれば、右の方にことごとしく長く續きたる藪ありて、見ればけさこし土堤の藪なり。はるかに見れば、なほながきやうにぞ見ゆる。みぞろ池のそばを行く。昔この池を見しことあれど、年久しければ、はじめに見たるやうなり。池の面、水草繁りたれど、いまむかへる汀は水もすみていさぎよし。此池根本は美度呂池といふなり。しばし眺望のうちに思ひつづけし。

けふ見ては、みどろといはじみぞろ池みくさのまへの清きみぎはを六十あまり六年をへてぞみぞろいけわれもさこそは面がはりせめ。それより松が崎の壇所など間近くみてかへる。七月十六日にともす妙法の妙の字あざやかに見ゆ。まちかければ殊に大字なり。さて山莊に行き、ただとばかりにて、松が崎に構へおきたるやすみ所にいたりぬれば、日はやうやう

いりぬ。獵師をめしまうけて、高野川に網をうたす。やがて夜にいりぬれば、夜ふりといふことをさす。あふぎ網のおほきなるにて魚をとる。鮎はとくおちたれば、はへなどいふ魚なり。ゑふこに入りたるは皆あがりたれば、水ある桶にいりたるばかり生きてある。それはもとの河へはなたせつ。晚炊のまうけ事具するよしいへば、おのおの物くひて盃をとる。河のあなた松が崎山のふもとに松蟲なく。ところが珍らしく面白しと聞けば、やがて多く鳴きたちて、後は耳かしましく、こゑこゑひまなし。今は更けぬべしといひて歸路をもよほす。そこにて輿にのりて三町許も行くほどにやあらむ、いささか雨そそぐ。皆人笠をとりて供奉す。道のほど遠ければ、京に歸りつきぬるは、寅のなかばにてもやありけむ。賀茂にての詩歌十五首の題にてありし。いまちとくはへまほしき作者もあれば、後日に題をくはへて三十首となしぬ。題は藤谷中納言に仰せてかかしむ。

秋 天

愚 作



曉堤行盡到<sub>二</sub>郊北<sub>一</sub>  
流水高林清淨地

晴日秋天爽氣新  
更加<sub>二</sub>畏敬<sub>一</sub>拜<sub>二</sub>靈神<sub>一</sub>

秋 日

通 躬

かも山に<sup>の</sup>みゆきを神もまちえたる今日とやてらす秋の日の影

秋 月

實 積

鳳輿拂曉出<sub>二</sub>仙關<sub>一</sub>  
時見神山半輪月

玉露金風幸路長  
餘光知是<sub>二</sub>自和<sub>一</sub>光

秋 星

隆 文

秋はすむ空にみがけるあか星のひかりよりおく露ぞ身にしむ

秋 風

通 晴

六龍轉<sub>レ</sub>北幸<sub>二</sub>林丘<sub>一</sub>  
水殿瓊臺殘暑盡

此日天晴爽氣浮  
金風拂<sub>レ</sub>席鳴河秋

秋 雲

爲 久

雲をなす早田の稻もかたをかのこすゑをかけてなびく秋かせ

秋 露

爲 信

この秋はみゆき待ちえて神がきの内外につゆの玉をしくらし

秋 朝

實 陰

あき風に外山の日かげ待ち出でて花に行く野もはるる朝ざり

秋 夜

爲 範

山川無<sub>レ</sub>處不<sub>二</sub>清光<sub>一</sub>  
變佩聲和寒蜚韻

月散<sub>二</sub>桂華<sub>一</sub>霜亦香  
侍臣忘却<sub>二</sub>路程<sub>一</sub>長

秋 山

惟 永

つかへつつなほ幾秋のみゆきをもこの神山のまつことにせむ

秋 杜

詔 光

曾貪<sub>二</sub>暖艷<sub>一</sub>弄<sub>二</sub>春芳<sub>一</sub>  
山近尤知多<sub>二</sub>雨露<sub>一</sub>

又<sub>二</sub>惜<sub>一</sub>清陰<sub>一</sub>占<sub>二</sub>夏涼<sub>一</sub>  
已看萬葉半<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>黃



秋野

従久

百草のはなのさかりにみゆきして今日こそ君がみあれ野の秋

秋田

氏敦

幸路平田恩露濃

黄梁穂穂帯金風

春苗秋稼雨陽若

何處村歌知歳豊

秋霧

光榮

片山のもす鳴くはやし霧こめて夕ぐれさびし野邊のみちしば

秋川

爲久

夜ならば月のひかりをそへて見む秋ふかくすむ賀茂の川みづ

秋橋

實陰

月すめば霜やしろきとかささぎの渡すにまがふみねのかけ橋

秋草

公野

忘れめやこの朝露に色まさる野邊の千ぐさのあきのさかりも

秋木

實岑

秋色稍深滿袖涼

松杉連朶露風香

又期神嶺葉紅日

玉駕再陪來此場

秋竹

宣通

猗猗綠竹傍林塘

葉底葉間白露香

壽色自追變路輓

秋風萬里拂雲長

秋鳥

愚詠

秋ふかきかもの山かげ朝さむみこのはもよほすいろどりの聲

秋獸

雅富

月もいま更行く野邊に鳴く鹿はいかにつれなき妻をこふらむ

秋蟲

雅季

よろづ代の秋のみゆきも今よりとなほ松蟲やねにたてて鳴く

秋扇

光潔



炎蒸已去更無功

執扇須臾藏篋笥中

灑氣爽涼臨幸地

陪宴偏喜對恩風

秋衣

通夏

めづらしと君や聞くらむつちの音もまぢかき賀茂の里の砧を

秋席

兼親

みゆきしておましよそふる細殿のけふのむしろに契るいく秋

秋色

爲香

山姫のこころの色もいくしほかなほ染めつくせ秋のもみぢば

秋聲

詔光

吟蛩秋老蕉階月

宿雁夜深蘆渚風

颯颯清商自何處

指頭來到入琴中

秋香

通躬

この秋のみゆきに君が袖のかもまじる花野はいひ知らずして

秋社

公福

かかる世にあへるを神もうれしとはさぞみたらしの秋の河波

秋祝

長義

千千の秋もけふにはじめて幾度のみゆきを契るかものみづ垣  
勘解の小路前大納言へは、後日に題ふたつを一たびにやらせつれば、その請  
文に、この兩篇の詩を短尺にやがて書きつけて奉りし。この詩どももおもし  
ろし。ひと日武者小路大納言の詠進のさまとひとし。まことにこの兩亞相の  
詠作ども、五十年來朝廷に肩をならぶるものなし。末世といへども朝廷雅會  
のむしろを潤色するは、ただこの兩卿のみ。

享保十四年

二月のはじめの三日、例の山莊にとて行く。まだ春寒ければ、池にをし鳥あま  
た居るよしをいへば、それを見むとてなり。朝のほとまづ上の御靈に參詣す



べしとて、正親町を北行す。右の方は寺寺の門前なり。歡喜寺をすぐるほど、例の涙ぞもよほさる。されど今日も神事に出立ちたれば、廻向などはえせず。むねのみふたがりて、ただ一首思ひつらねし。

口にこそいむとていはね。今日もまたころのうちに唱へてぞ行く。さて御靈にいたりぬれば、拜殿の前に輿かきすゑたり。やがて出でて拜殿に登る。手洗ひ口すすぎて後、神前に二拜して、祓祝詞などの後、おりて其あたりを見めぐる。大神宮殊更に拜して、そのほか數多の末社にも心念して行過ぐ。ここかしこ見ありくに、しばるといふもの珍しからむとて、其儘おきたりといふ。楊弓場もそのまゝありといふ。そのわたりをも見つつ、また輿に乗りて、北の鳥居をいづ。とばかりありて野に出づれど、今日はわりなく朝霧渡りて、山山もさだかならず。空も曇りたれば、いつ日の出でたるもわかれず。八大天王によるべしと仰せて、鳥居より奥深く入りて、やすみ所構へたる所に輿をすゑたり。いつも鳥居の前はゆけど、かかる社などあるべしとも知らざり

き。石壇をのぼりて拜す。社の左の方に天照大神の小社あり。拜をなし心念などしてだんを下りぬ。其ほか小社どもあり。荒神の塔もあり。其わたりより山に登る道ありと見ゆれど、山まではのぼらず。後に聞けば其山のうへに、松茸おほく出づるよしなり。社の右の方に石三つあり。賀茂下上鷲柱といふ札を建てたり。これはけふのためなり。この三つの石いかなる故のあるにや。またそのあたりに赤山権現といふ札建てたる石もあり。八大天王の社はまつる所。祇園三座の中、八王子の神なりといふ。神體五男三女の神なり。暫く此處にありてものなどいささかくふ。

いつもただ前わたりせし神壇にいりてぞむかふ。八つの大みこなど思ひつづくるうちに、見ればいささか空はれて、日も高くなるのぼれり。

山の端も見えてぞはれぬ。春の霧三竿ばかりはのぼる。あさ日に日出三竿春霧消といふ句を思ひ出でていへり。これを聞きて、

冷泉中納言



日の昇る高峯やいづこ目に近き外山も見えずきりわたる空

久世前中納言

しばしこそ日影もくもれ春の霧晴るればむかふ四方の山の端  
これより鶯の杜にあゆみて行くべき道をとへば四五町ばかり民家續きて  
あり歩みゆくべき道にあらず間近きところ詩仙堂といふ處ありこれは樹  
木繁りたる中を行けばよそよりも見えずあゆみても行くべき處なりとい  
ふこの詩仙堂は昔石川丈山が在世の時分より聞及びにしところなり行き  
て見むといひてあゆみて行くほどなく門にいたりぬれば門前三十段あま  
りの石壇ありそれをやうやうにのぼりて詩仙堂のゆかにのぼる八疊許の  
座敷たて四方の小壁に三十六人の詩仙の像贊を板に書きて九枚づつかけ  
たり床には琴一張をまうけたりそのわたりの座敷二間三間を見るかたは  
らより登る二階三階あり階子ことのほかに急に急にしてあやうげに見ゆれば  
のぼらず三階の景もあたりの樹木しげりはてたれば珍しき景もなしとい  
いへば

ふ三階に様様の器物あるよしなればとりにやりて見る皆丈山が時の物な  
り自然木の脇息をはじめ自然木の器物なり一つ一つに作文を彫りたり覆  
醬集に見えたればここに記さず處處に額あり皆丈山が筆なり此處にて  
からの歌のひじりを數多うつしるもその名もともに朽ちぬ庵やいかな  
といへば

冷泉中納言

この宿の名にこそこのせからのひとの姿こと葉をみづくきのあと  
六勿の銘などのおのおのよみほどきて興じつついでぬすこしあゆみて興に  
のり鶯杜にゆく山道なり三箇處ともに一乗寺の山の西のすそなりこの社  
は鬚す咫た天王の社といふ鬚す咫たといふは神代卷に入握い鬚すとあるより稱する  
なるべし咫字をたとよむは八咫鏡の咫同心なり此神體も素盞鳴尊なりか  
たの如く拜し心念す

おりあるを見し鶯のもり過ぎがてにわけきて今日はむかふ神がき



など口すさびて、やがて輿に乗る。山道を行くに圓光寺西蓮寺などいふ寺の門前を過ぐ。西蓮寺はこぞの春、佛法僧といふ鳥の巢をくひし所なり。其巢つくりし木を見る。すぐれて高き榎の木なり。梢繁りたる上に、また一段高くしげれる枝あり。其枝に巢作りしよし、去年の春ここにきて、よく知りたる者其よしを申す。

聲を聞きすがたをいつのはるか見む佛法僧のありしこずるに、ほどなく壽月觀にいたりて、ものくひ盃とりなどして、其後隣雲にのぼる。をし鳥はかつて見えす。心ゆかぬことに思ひつつ、しばしありて、若かくれたるかたに、をし鳥おり居すや、見てこよといひつれば、若き輩窮途のあたりに行きて見れば、をし鳥はゐすと申す。猶ふたたび行きて、すみなる入江のわたりを見よとてやりたれば、例のすだきゐる入江より、人におどろきて立上りたるをし鳥五六十羽もやあらむ。池の面に群れきて、むかひゐたる西の汀におりぬ。なかばは水に浮び、なかばは汀にあゆみつれていと興ありき。

心あれやあまたのつばさむれきつつみる目のまへに遊ぶをしどりとかくするほどに、やうやうくれ近くなれば、隣雲をくだりて、音羽川の汀西にあゆみて、林丘寺にいたる。しばらく物語りし、ものくひなどして、やがて野の方をあゆみつつ、壽月觀にかへりぬ。晚炊おのおのしたため、盃あまたたび取りなどして、京にかへりぬれば、亥のなかばにてもやあらむ。後日圓光寺の住持瑠長老奉りし。

己酉仲春三月

太上法皇幸修學院行宮者回竊聞門前警蹕過林

麓野僧不論賤陋欽賦蕪詩一章奉祝延聖壽萬萬

歲云

前建 長支瑠

二月東風暖正還

翠輦時出九重闕

柳垂輦路供

宸詠

梅咲宮牆遲

元陵御記 下卷



聖顔 龍亢瀉來崖上瀑 鼈頭擎起水中山

御園直是神仙境 造物獻

齡春日閑

此玄瑤は六十年前在位の時禁中に勤めし前田安藝守といへる武士の子なり。さいつ比三十三所の観音に奉納すべき三十三軸の普門品のうちを一巻かかせ、其外文章などのこと仰せし僧なり。

享保十四年

やよひ二十日あまり八日、山山つつじの盛なる頃なれば、松が崎賀茂の壇のつつじなども見るべし。また西賀茂の山に幸茶壇といふ所は、舊院御幸の事ありし所にて、それ故に所の者今に幸茶壇といふよしなり。さらばこの所にゆくべしとて出立つ。

ありあけの月をみやこにかへり見てゆけばそなたの野邊遠きみち

と口ずさみて行く、とかくの程にけしきばめど日はまだいでやらず。

野邊遠くゆけどまたれてあさ日かげにはへるそらの峯（くも）にひさしき

やうやうにして日出でぬれど、また嶺にかくろへなどする。

山あひに出でぬと見しもまたたかき峰にかくろふあさ日かげかな

行き行きてまづ例の山莊にいたる。暫くありて後山莊を出でて松が崎へゆく。此度は山の西に幕を設けたれば、いつもの高野川の方へは行かず、右の方なる山につつじ多く咲きたるを見つつ行けば、壇所のほとりになりぬ見やれば壇所へのぼる道、入口の門など近く見えて、其上（かみ）に所化の僧どもの居る所長く建續け、その奥に堂など見ゆる。そこを過ぎて在家ある所を右の方に見つつ行けば、ほどなく休幕張りたる所にいたりぬ。輿より出でて見れば、去年こし所よりは見渡し廣く晴れたるところなり。ふけ田を隔てて遠く山を見る。つつじはさのみありとも見えす。しばらくありて田中の道をはるばると行きて、山のふもとにいたりぬ。右の方なる岡につつじ多く見ゆ。その岡に



行きて見れば今盛にて、から錦をしけるやうなり。左の方を見れば、木の間に  
おほきつつじの木、おほくつづきて、峰まで咲きのぼれり。おのおの詩歌ある  
べしといふ。

愚詠

この山のふもとのつつじいく千年おくある花の春のくれなる

同

遠くではなほあかずとて行きて見る山のかひある岩躑躅かな

中務卿宮

朝日さす山べの躑躅くれなるの色をそへてやみゆき待ちけむ

一乘院宮

けふかかるみゆきを花もうれしとやおもひの色に躑躅咲く山

三條大納言

つつじ咲くここは所も松が崎まつつれいのいく千代みゆきまちけむ

鳥丸大納言

いく春のみゆき思へば松が崎つつじも千代のたねやまさけむ

奉陪鸞輿看北嶺躑躅 愛宕中納言

仙輿駐蹕帶和風 到處春深躑躅紅

葉葉染成臙脂色 群山豔景勝霜楓

久世中納言

このみ幸なほいくたびと松が崎つつじも色にやまをてらして

從仙駕賦躑躅 伏原二位

初見松崎躑躅紅 帶山映水燒春風

鷺拳燕翼弄晴景 玉盞數巡錦張中

武者小路三位

めづらしきみ幸をかねて松が崎つつじや道のいはねにも咲く  
やすまくにて各盃とりて後輿にのりて西賀茂にゆく。まづ幸茶壇に輿をす



ゑたり出でて見れば、昔はさもあらしを、今は四方の梢おのがままに生繁りて、何の風景もなし。ほどなくそこをくだりて、あゆみて靈源寺にいたる。瓦しける廊よりのぼりて、佛壇の前に跪きて、舊院の御影三拜して、普門品を暗誦し、念佛廻向の後、開山一絲和尚の像に對す。

この寺にありしひじりの姿までわがたらちねにそへて見しかな。さておくなる間を見れば、床に舊院宸翰の山號寺號二幅、同じ宸翰境内の山のことある女房の奉書一幅を、二幅對のそばにかけたり。ここかしこを見て後、この寺をいでて、それより奥の方に行く。醍醐前内府の山莊を見むとてなり。冬熙公道まで迎に出でて案内なり。まづ楊梅の木を見るべしと申さる。これは智徳院關白の時よりの木にて、舊院の御時故冬基卿、毎度その實を獻す。舊院好み給ひて御賞味ありしなり。たぐひなき大木にて、風味もすぐれたり。愚身も好物にて、冬基卿の時より今の内府にいたり、斷絶なくおくらる。其木なり。これを見ること珍しきことなりと、木のもとにいたりて見れば、こと

のほか古木にて、大きな木なり。おのおの興じて見る。さてそれより奥にいささかしつらへる所ありとなればゆく。今日のまうけにかまへたるところなり。北に山ども間近くあり。則ち前内府の領山、其外も西賀茂の山どもなり。東には田面をはるかに見渡す。此所にてをりうづもの出ださる。其さまかさね硯にして、うへなるは我が前にすう。二十人ばかりのちひさき硯蓋にも菓子を入れて、一つ宛おのおのの前におく。いとめづらかなる趣向、おのおの興に入りてくふ。盃など二三度めぐりて後、其所を立ちてあゆみかへれば、やがて山莊にいたりぬ。かなたこなた、聞きしより見るにまされる家居のさまなり。天井は板のあじろ組、障子の腰は竹の籠、杉戸はすだれのうちの襖に短尺色紙を押ししたるさまなり。手跡たれにてあるらむとよりて見れば、かける歌ども、まことの文字は一つもなし。皆作れる字、作りたるものなれども、皆まこととの文字のやうなり。目をおどろかしぬ。襖の挽手、其外ものすきなることどもなり。智徳院關白の時のものとなむ。次の間の杉戸、牛を書きたりと見ゆる



に頭はいづこにかあると尋見れば、うしにてはなく、黒き衣服を臥籠にかけたる體を書きたる繪なり。同じくいづれも目をおどろかしぬ。おくにかこひの間あり。床に舊院宸翰かけて、爐に釜かけなどしてあり。智徳院關白茶の湯せられし所となむ。菓子など出でて、しばらくの後に座を立ちぬ。

宮居より西なる賀茂の山にきてなれしむかしの人をしぞ思ふ故大納言とりわき心やすかりし人なれば、懷舊の情をうかびしままにかくなむ。

たらちねのおよばすたかき位山のぼりし人のやとをとひきてなど盃とりて、とかくするうちに思ひつづけたれど、口よりは出ださで立ちにし。それより山をあゆみくだりて、河原面に出でぬ。うちはれたる氣色なり。賀茂河にいたりぬれば、これより貴舟くらま道などいふを聞きて、社頭の前に出づ。せみの小川の邊にまうけたるやす幕にて、かれいひくひなどしてかへりぬ。

後日靈源寺僧徒獻賀章。

誠惶誠恐頓首謹惟、太上法皇日夜景慕。先帝于羹情之餘、搜索陳跡。光幸清山、願視幽栖(唐イ)。開啓宸襟、是實資顯遺願。榮昌祖宗者、山林聳翠、頑石點頭、共惟義靜。今當寺辱奉、值此嘉祥、何等盛事、寧能勝焉。不堪激切屏營、肅肅敍暢鄙懷、賦賀章一篇、以銘劫石、奉祝無窮云爾。維時享保十四龍集己酉三月二十有八日也。

孤峯拂路捧金輪  
御幸豈祇逐虞舜

綠塢青巖供德綸  
發輝佛祖萬年春

靈源點湛義靜稽首和南

本師老和尚賦雅詩一章奉祝御幸、因和嚴韻呈寸情爾云、伏乞郢正。

親慕古皇轉幸輪

山花織錦柳垂綸



清涼峯頭添風月

岳色溪聲別置春

清涼山下文什九拜

享保十四龍集己酉抄春二十八日

太上法皇臨幸洛北靈源禪寺。是偏出於追憶先帝。歸敬先祖之叙襟。實佛門之光輝。而叢林潤色者也。孰不感喜哉。予一日偶爾至焉。堂頭大和尚賦華偈一章。以賀臨幸。俾予和之。予也辱預同門之數。豈可固辭。終依大韻。志喜云爾。伏乞慈斤。

六龍鳳駕一香輪

行幸北山言如繪

金地先知光寵遠

主翁爲記御遊春

祖要九頓拜

これも後日におくらる。

上賀茂に御幸おはしましつるをり西賀茂の山

莊へ祖父昭良公の舊跡とてみそかに渡らせ給

ひぬる事ありがたく覺え侍るまに 冬

熙上

今ぞしる君がみゆきの折にあひてけふこの山のかひもありとは  
ほど經て後にかきておくりし。

### 享保十四年

今年は夏よりこなた諸司代江戸に在府する故に、八月九月野山面白かるべきをりをすぐし、あまつさへ山莊の紅葉盛なるよしをいひおこすれど、行きて見むことかなはずして、せめて近侍の堂上、其外非藏人ともなりとも見にゆけとて遣はす。壬九月の二十日あまり、兩日にことごとくやりぬ。堂上の輩おほく詩歌を獻す。其後に諸司代上京しつれば、今はとて神無月十一日に山莊にゆく。此度はいづくへもよらず。山莊の紅葉このほどまでは、染残したるもありしを、をととひきのふの嵐はげしくて皆ちりぬといふ。けふはただわづかに二木三木ばかりぞ散りて残れる。



知らずたがまてと教へて遅紅葉一木二木はそめのこしけむ  
毎秋めできぬる隣雲の軒のみちもよべけさのほどにやちりつくしけむ、  
いまだ色あせぬ落葉のこのもとにあるをひろひて、

めできつる軒端の楓木の本の落葉をだにとひろひてぞ見る  
三條大納言

冬かけて残しおきける山姫のこころの色もあかぬもみぢ葉  
鳥丸大納言

みゆきするけふの山邊は秋をおきて時こそありけれ残る紅葉ば  
清水谷大納言

君がため山には秋を今もなほ残すもみぢや染めて見すらむ  
愛宕前中納言

隣雲亭上駐<sub>二</sub>仙躰<sub>一</sub>  
飛瀑千尋洗<sub>二</sub>綠苔<sub>一</sub>  
掩<sub>二</sub>映岸頭<sub>一</sub>紅錦繡  
喜看楓葉入<sub>二</sub>叡才<sub>一</sub>

清 二 位

玉輅乘<sub>レ</sub>晴台嶺前  
霜後絳楓滿山錦

追陪衝<sub>レ</sub>霧過<sub>二</sub>清川<sub>一</sub>  
粧<sub>二</sub>點衣裳<sub>一</sub>照<sub>二</sub>綺筵<sub>一</sub>

武者小路三位

染め染めて秋にもまさるこの山のもみぢの錦しくものぞなき  
梅園 三位

この山の木木の紅葉も色そふや君がみゆきのけふを待ちえて  
けさ道のほどに、山山のふもとに散残したる紅葉の、所所にあるを見れども、  
霧ふかくてさだかにはなかりしかば、詩の一二句を作りて、山莊にいたれる  
後、おのおの二句づつがせられたれば、十六句の長篇になりぬ。

髣髴殘紅山麓遠  
朝陽既上欲<sub>レ</sub>晴處  
多少風光殊<sub>二</sub>俗境<sub>一</sub>

惜哉今日霧中看  
偏據<sub>二</sub>玉吟<sub>一</sub>佳興歎  
共傾<sub>二</sub>盃酒<sub>一</sub>莫<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>乾

愚 作  
實 岑  
光 潔



宸遊短暑正還舍	緩步逍遙諷詠闌	通	晴
水綠松高橋上白	清霜滿眼不嫌寒	宣	通
靈臺自是浮祥氣	斜照襯雲映畫欄	通	貫
珠箔玳筵芝蘭馥	頻催仙杖更盤桓	正	逸
追陪池畔暮天霽	遙約千秋月光寬	長	義

享保十五年

こぞの秋諸司代江戸よりのぼりし時、幡枝圓通寺などは御幸ありてもくるしかるまじきよしを聞きてのぼりしかば、よろこび思ひて、春つつじの頃よりまうづべきよしをかねていひけるに、睦月中頃より世上ものさわがしく、盗人あそこここに火をつくること、いくたびといふかぎりなかりしかば、御幸などもよほすべきにあらず、やよひなかば過ぐる頃、やうやうに世上おだやかになりぬ。躑躅のさかりはとく過ぎぬれともよほしたてて、卯月十二日

におもひたつ下賀茂社家町など過ぐるほど、目なれぬ道にて珍しくおぼゆ。賀茂山のふもと松が崎山の間を通りて圓通寺に至る。賀茂山はつつじの花いまだ多く見えたり。圓通寺にいたりて、まづ觀世音の前に三拜せしめ、普門品などをよむ。自筆の心經を佛前に寄附す。此寺は昔園光院禪尼文英居住の寺にて、朕九歳のとき此寺にまうでて、五日逗留しき。座敷のやうなどは昔見しにかはらず。佛壇昔は縁よりつづきて、上り段三つばかりのぼりて堂ありき。今は堂なくて、佛壇座敷のおくにあり。年久しくて見しことを思ひつらねし歌。

七十にひととせ足らぬ昔わが見しこの寺をいまもとひきて  
心におもひつづけたり。佛壇のそとに額あり。隱元琦普照國師の筆なり。觀世音の左に佛像あり。右の方には文英禪尼の畫像あり。繪は一乘院眞敬親王、讚は妙法院堯然親王の作、自筆なり。其座をたちて庭などを見る。庭は昔見しにかはりて、誠に寺めきたるうゑ木大木の松などあり。縁をめぐりて白華庵に



いたる。ここは昔見ざりしところなり。床に後水尾院宸翰二幅圓通かけたり。次の間の襖のうちに佛壇あり。文英の木像なり。この額は普照國師の弟子惠林といへる僧の筆なり。ここにも暫くありて、潮音堂茶屋などを見むとて出でたつ。まづ潮音堂にまうづ。聞きしより見るは増りて、堂のさまよくぞ見ゆる。壇の中央に佛像あり。其左右に三十三所の觀音の御影を作りて、五壇にあり。佛壇をめぐりては、三十三所の巡禮になぞらへつべくもまうけたり。其外ここかしこに佛像あり。此堂の額は、先年より住持所望せしめ、書きてつかはずべきよしを言ひつれど、今までにうちすぎぬ。坂をくだりて東に行けば、茶屋にいたる。おのおのかれいひ食ひなどす。さきに圓通寺にて題をさぐりし詩歌、おのおの短尺にかく。

餘花在何

公

福

いづくにかとひえて春におくれしも心ある花とけふ詠めまし

新樹風

隆

文

見し花の面がはりして夏木立若葉にやどるかせのすすしさ

行路卵花

爲

信

行くみちの末に見えたる卵の花はただ時しらぬ雪の面かけ

遠尋子規

久

季

山深く尋ねきにけり時鳥さだかに名のなれけふのみゆきに

早苗多

愚

詠

植ゑわたす早苗幾町はるばると山本かけてつづく田の面は

野外螢

通

晴

初夏緑陰枝上鵲

生涼麥浪犬牙田

黄昏點點飛螢影

野酌興來照夜夜筵

松下泉

實

岑

逐涼移座卜松陰

湛湛奔泉一流深

山麓風光塵世外

頻賞閑味促閑吟



寄雲戀

師香

年月のはれぬおもひにたぐへてやなほ重なる四方の浮雲

寄河戀

爲久

せきあまる音には立てし音羽川心のたきは袖にたつとも

寄鳥戀

光榮

ほととぎすありし垣根の同じ音に妹が名残もしたひてぞ聞く

薄暮煙

宣通

勝日登臨游目時 歸鶉閃閃擇深枝

前村楊柳暮煙起 山色朦朧月亦宜

谷古橋

公野

むす苔の同じ翠も谷かげにいく世をかけて残るいたはし

古寺鐘

爲範

翠幙重重山色晴 圓通古寺物光清

殘花新樹興何盡

唯怕樓鐘報暮聲

田家水

從久

賤に住む山田のいほの明けくれはかけひの水のもるに任せて

山家眺望

雅富

世はなれてすめる庵は峰たかみ都を雲のよそにこそみれ  
今日白短尺なり。題者冷泉前中納言暫く野山の氣色をめぐらしくながめ、叡  
山の雙輪塔も見ゆ。くれつかたになりて、また例の山莊に行く。かへさにさが  
り松のもとに輿をかきすすゑさせて、月のさやかなるを見る。

空行くもなかばをすぎてさがり松のかげに月みる夜はふけぬめり  
後日圓通寺の僧侶賀詩を獻す。

曾承太上法皇往昔潛龍之日。行啓于當寺開基圓光院尼大

師之山亭。而倚輦輿數日。世以爲盛事焉。大師由來有大願。以

亭爲寺。聖朝新賜無雙之宸翰。終成勅願之道場也。如今六十



年後、重又倚輦與半日、親叙覽大師之遺蹤、寔未曾有之榮幸也。臣僧某甲辱蒙勅許住此寺三十餘歲、荷朝恩特渥矣、老後亦隱栖此寺、而逢如斯好時、恐懼歡躍、豈可言哉、故不愧禊才、綴俚詩一章聊述野僧萬乙、是一祝延叙算無窮、二顯揚寺門光輝云爾。

雲車重倚北山邊

夏日舒長輝石泉

伏仰聖躬倍安泰

祝延叙算幾千年

享保十五庚戌歲孟夏十二日

寬溪永恕頓首云云

今茲享保十五歲孟夏之日、仙與暫幸臨當山、寺門盛幸、蔑以加焉、弊師寬溪、恐喜之餘、綴俚詩一章以奉祝叙、齡、臣僧亦漫同其韻、恭奉祈聖壽萬安云。

大鶴聖沙誠恐惶稽首

御駕崢嶸自日邊

嶺松奏壽應溪泉

寵光特被圓通境

共唱南山祝萬年

### 享保十五年

長月の十二日幡枝へ行くべしともよほし立てていづまづ賀茂に行きて、西の河原に休所まうけたるに至る、西の山本かけて見渡すけしき、南北もはるかに見渡さる、西北の山は皆西賀茂の山どもなり、北なる山の半よりもみちの染めたる有り、ことしいまだ紅葉を見ねば興するに、冬熙公座にありて、かれはぬしの領分の山なり、染めたる木のあること、いまだ知らざるよし申されしかば、

あるじにや先づ見よとこそ染めつらめ知れるよしある山の紅葉は、ま近く賀茂河の流のおもしろきを見て、

見わたせばつらなる西のやまとほみちかきかはべは水ながくして  
岩こゆるそらのしらなみいさぎよき河邊のまとゐあかぬけふかな



あるじにやとよめる返歌に醍醐前内府

みそなはず君がためとぞ染めつらめわが心知る山の紅葉は  
座にさぶらふ人人に章句などはなきかといへば、

秋山紅遍（奥イ）観

清 二 位

爽景日添レ長

愛宕前中納言

晚籟疑ニ冬至一

愚 作

廣郊待ニ月望一

勘解由小路辨

霧暗（讀イ）流水緑

一 乘 院 宮

竹密岸風蒼

風 早 三 位

啼雀爭投レ宿

桑原前中納言

歸鴉幾趣レ陽

清 二 位

飛レ盃花塢醉

愛宕前中納言

乘レ艇柳江盪

押小路前宰相

聯句表十句の後、漸く日たけぬといへば、出立ちて幡枝に行く。けふはめづらしき山にて、茸がらすべきためなり。まづ佛前に参りて焼香し、普門品よみ念誦す。白華庵の床に後水尾院宸翰御製をかけた。幡枝といふことをたち入れてと御詞書ありて、

ゆかではたえたへじ春の山里（はぐ）に見しおもかげの月はかすまず

これを見て後おのおのかれいひなどしたためて山にと急ぐ。潮音堂にまづまうでて、其ほとりよりのぼる道あり。坂道に竹にて欄檻を拵置きたれば、それをとりつなどして漸にのぼる。道の邊松茸あまたあれば、それをとりつ登る。人人にもおほくとらせたり。山のいただきに休所をまうけたり。昔は今麓にある茶屋此所にありしといふ。六十九年さきに來りし時は、麓にはなくて此所に茶屋のありしを覺えたり。西の方遠く見えてめづらし。西いぬ亥にあたりて、何やらむあまた見ゆ。藏の白き土とも見えす。いづれも見て何やらむといふ。遠目鏡をとり出でて見れば、去る六月に上京大火ありし所にて、人



家あたらしく立てたる屋根なり、思ひがけざるものを見ることかなと口口にいふ、北野の社も見ゆ、しばらくのち山をおりて茶屋にゆく、かのとりたりし松茸を調味させて各食ふ、晝の聯句此所にて大概表十句をとげたり、供奉のうちありて久世前中納言、

都にてむかふはおなじおほひえもところがらなる秋の山本、其後圓通寺にかへりて、晚炊おのおの食ふほど、月さやかにて、ところがらめづらしくおもしろし、白華庵にて見つる舊院の御製を思ひいでてつらねし、これも幡枝といふことをたちいれて、

かすまずと見しより後はたえたるをつぎてもこよひむかふ月かなとかくするほどに歸路をもよほしてかへりぬ。

享保十五年

霜月になりてまた思ひたつ、このたびは吉田、神樂岡、白河などに行く、修學院

の山莊にも立寄るべしといふ、十六日になりてまづよし田に行く、野にて見れば北山はここかしこ雪なり。

比良のたけきふねあさひの嶺にけさ雪を見つとも過ぐる野邊かな、神樂岡にいたりぬ、山近くなりて見れば、方方に色こくあかき實ののりたる大木あまたあり、みつきといふものなり、山の上は嵐ことごとしくはげしくてたへがたし。

山にてはあらしはげしくあるる日にさこそみやこも冬ごもるらむ、花もみぢみるかげもなき冬がれに色づくこのみふかきくれなる、おのおの酒數獻の數、東のかたより山をくだる、そのみち真如堂、鹿谷、満願寺などを見る、けしきよし、しばらく眺望して、山のふもとにて輿に乗りて白川にゆく、いたりて見れば、いまだこほりみちたり、瀧のおつる音ばかりぞこほりとけたる。

池ひろくとづるこほりも瀧おとすかたへはとけてよするさざ波



瀧の水上は木のまにぞ見ゆる。この木楓のよしなり。紅葉のころは一段風景よしといふ。

いくひろちひろと知らぬ水上あげたかきこのまに見えておつる瀧津瀬  
床の掛物花鳥の唐繪なり。おくの間のふすまさまの繪なり。次は巢父、許由、七賢なり。二間ともに探幽が繪なり。そのにしに小座敷獅子の繪これも探幽なり。ここかしこ見ありきて、晚炊など過ぎて修學院の山莊にゆく。道のほど思ひしよりも遠し。かれる田のあせに、うつくしく赤く見ゆるあり。よく見れば、枯れ色づける淺茅に夕日のうつれるなり。

なにならぬ枯野の淺茅いろよくも見せて夕日のかげぞ染めけると思ひつづけて山莊にいたれば、日もいりぬる後なり。やがてもよほしてかへる。いまだくれざるほどなり。四五町行きぬれば、松ともしなどして夜にいりぬ。月さやかなれば、

かへるさの野邊のなか道くれそめて、跡よりおくる山の端のつき

などつらねつつ、初更のなかばほどに歸りつきぬ。

享保十六年

今年は春のうち餘寒ひさしくて、うち過ぎぬるほどより卯月になりぬ。つじやうやうさかりなるべしと聞くほどに、松が崎の躑躅を見むともよほして、はじめの六日まづ圓通寺にまうづ。野にいでたれば菜花さかりにして、こがねを敷きたるやうなり。

春にたがつみのこしけむ草の名の花ぞ野もせにいまさかりなるかく思ひつづけて行きける。ここかしこにひばりの聲を聞く。野外のけしき心ぞのふる。あやしき賤が垣根に、うぐひす花やかに啼く。これは都みやこにてはなかなか聞かざりし。めづらし。

ひばりなく野を過ぎきつつ山賤の垣根にきくもあかぬうぐひす  
圓通寺に行きつきて、佛前に三拜して、焼香誦經などをはりて、白華庵に行く。



禪尼の影前に念誦の後、しばらくありて寺の庭へくだる。かなたこなた見ありきて、それより山の麓におりて、茶屋山のまへをあゆみて、檜木峠といふところにていたりぬ。供奉の輩、木木のこの葉にあまた甘露あるよしを申す。とらせて見れば、まがふ所なき甘露なり。かれこれねぶりて見れば、去年去去年嘗めたる味に同じと申す。げにもここに來て甘露を見ること悦びにたへず。後日おのおの詩歌あるべきよしをいひてその所を過ぐ。峠を過ぎて山をめぐれば、御ぞろ池にいづ。池のなかば過ぐるほど歩み行けば、やがて民家近くありといふ。それより輿にのりて松が崎に行く。山のいただきに休幕はれり。その所にのぼるほど、坂道ありてやすまくにいたる。いささか曇りたれば、淀川などもほのかに見ゆ。こぞ幡枝の山より見し西陣の在家おほくたてそへたり。南には三條の橋など、そのわたりさらせる布など白く見ゆ。しばらくありて麓にくだり、松が崎山をめぐる。此道すがら山につつじ多くてさかりなり。輿のうちより見つつ行過ぎぬれば、高野川のほとりの休幕にいたりぬ。此所

にておのおの歌よむべしといふ例の巖石峯までつづきて見ゆ。つつじもそれに随ひて咲きたり。

尾上までたたまあげたる岩がねにつつじも花の咲きのぼりつつ山のふもとを見れば、さいつとし見しをりは、麓に二間ばかりにて、北まで長くつづきたる草原ありて、すすむしの聲おほくきこえしところなり。つるが、今日はそのところなく、山の根まで河水つづきたり。河も瀬もいできて、水の音もせはし。これはひととせ洪水にて、賀茂の西の河原、つつみの松多くほれて流れたるといふことありき。そのをりの水に所の様かはれるなるべし。夕炊の後おのおの作進書きつく。

折 句まつがさき

待つといはば躑躅咲く山かくてまた盛すぐさぬきても見ましを

同たかのがは

たつ事まじぞかた山躑躅残る日の河邊のまとゐはなにくらさむ



躑躅咲くおなじ岩根はまつがさき花もや千代の御幸待つらむ

一乗院宮

知恩院宮

千代經べき君がみゆきやまつが崎山の躑躅も今さかりにて

妙法院宮

(歌四)

冷泉前中納言

松が崎生ひそふちぢの岩つつじたが同じ世に種はまきけむ

初夏隨玉輿見山野躑躅菜花 押小路前宰相

菜花滿畝黃千里 躑躅照山紅四方

今日加陪瓊席下 又憐春後有春光

巖榴皆絳嶺 實 岑

きなく時しれ山ほととぎす 愚 作

月もさぞ涼しき夕水晴れて

一乗院宮

飛艇滿帆風 通 貫

蘆葉一過雨 實 積

竹梢半卷櫺 實 岑

灯も影あけやすき春のよに 前中納言 冷泉中納言

けさまで霞む野はおぼろにて 一乗院宮

おのおのともなひて河邊を北に歩む。叡山の雙輪塔などを見つくなほ行けば、民家あるよしをいふほどに歸りぬ。いまだ日も高けれど、歸路をもよほすべきや、今すこしありてかへるべしやなどいふほどに、諸司代まゐりて、いまだ日も高し。今少し御歩行あるべくば、下賀茂へ歸路によるべしやといふ。これはよきなぐさみなるべしとよろこぶ。さきへ人をやりて雜人をはらはすべしといふ。しばらくありて、輿に乗りて東の河原まで行きて、はたに輿をおろし、供奉の雜人はらはせて、それより河原をあゆみて下賀茂へ行く。祭のま



へにて埒ゆひたれば、埒の東をあゆみ、いづみ河のみぎはに、しばらく水のい  
さぎよきを見つつ、樓門の前までゆき、埒の西をあゆみて、入口にて輿にのり  
てかへりぬ。日は入りぬれど、いまだくれほどに京にかへる。門前近くなるほ  
ど、やうやう松ともしなどして、くれ深からぬほどにかへりつきぬ。

享保十六年

卯月より後は思ひ立つべきをりもなく、うち過ぎぬ。長月にもなりぬれば、  
幡枝へ茸狩にゆくべしといふ。松茸いまださかりならぬよしなれど、みぞろ  
池にて夕月を見るべきよしいうて、十三日に出でたつ。空も心よくはれぬれ  
ば、とくより門を出づ。まづ下賀茂にゆき、河合の社の前にて、輿より出でて芝  
をあゆみて、東の河原に休所しつらひおきたる所にゆく。先年まうけたる休  
所より二町ばかり南なり。いたりて見れば、山山もいささかめづらしきやう  
にて目をよろこばしむ。あしたのほどなれば、すこし霧わたりて、ほのかなる

けしきどもなり。

遠からぬ田中のこすゑほのかにて野邊には秋のかすみをぞ見る  
しばらくありて歩みいづ。畔道をいささか行けば、今日のためにかけたる橋  
あり。わたるべき料にもあらざるめれど、おぼえずうちわたりて、

忘れては遠ざとまでも行きぬべく渡らぬはしをこゆる野のすゑ  
などうちいひてたちかへり、神前をへて本壽院といふ僧坊を見る。遊人のお  
ほくもてあそぶ所と聞きおよびつれど、いまだ見ざりし。行きて見れば庭な  
どもせまくうちおほひたり。見るべきほどのこともなければ、やがて休所に  
かへりぬ。今朝見しよりは霧もはれ、山山もさだかなれば、ここにて月をも待  
ち見まほしきなどこれかれといひて、

ここながら月も待つべし今朝見しもあらずよ晴れて向ふやまやま  
かくいふほどに日たけぬといへば、幡枝に行く。行きいたりてまづ觀世音の  
尊前にして誦經して、かれいひ食ひなどして山にのぼる。こぞの秋のぼりし



方ならぬ坂道なり道のほどおもひしほかに松茸多くて手に手に採る。後に  
聞けば百本よりも多かるべしといふ。式猿堂にて夕炊ととのへ、今日の松茸  
てうじなどさせて、とかくするほどに日もくれぬれば、此山の麓を東にあゆ  
みて、横の木坂を越えてみぞろ池に出づ。山の麓を西へあゆみて、かまへおき  
たる床のところにていたりて月を見る。風吹き寒くなりぬれば、しばらくほど  
月を見、酒二三獻の後京にかへりぬ。今日の歌ども短尺なり。

野外明月

愚 詠

はれい  
きりわたるよものなか空ひろき野に都忘れてむかふよの月

武者小路前大納言つねを京へ

かねて知る露もこよひの心あれや玉しく野邊の月にくまなき

鳥丸前大納言

みゆきする野邊の白露玉しきて月ぞもくここよひの名をもみがける

桑原前中納言

たまさかの野邊のみ幸の折にあひてなほ長月も光をそよらむぞそふ

久世前中納言

袖はへて露わけかへるこの野邊はみ幸を月の光にやすむ

愛宕前中納言

蛙蛙イ鼓秋蟲田畝裡 金風静夜捲二微雲一

郊原弄月移二仙杖一 輦路清光添二二分一

藤谷前中納言

もてはやす野邊のみ幸をめぐらしと空に知りてや月も隈なき

冷泉前中納言つねを京へ

ここもまた千世のふる道月ぞすむ跡ある野邊の秋のみ幸に

押小路前宰相同前

繡野鮮鮮明月中 露華綴玉幾千叢

堪憐佳興九秋夜 清亮前村一笛風



伏原 二位三十一

輦路黃雲滿地霜

瓊林綠水散清光

去年今夜射山月

雅宴移東開野塘

風早 三位

一鑑清光耀令名

千山萬水恣吟情

此宵若不陪金輦

爭見四郊秋影明

武者小路 三位

おく露の玉やちるらむ照る月もなほ名にしおふ野邊のみ幸に

梅園 三位

くもりなくなほ照り添ふや名にしおふ月も今宵の野邊のみ幸に

愛宕 三位

季秋爲月幸圓通

雲霧吹收薄暮風

曠野明輝興何盡

露華蟲韻詠吟中

錦織 大弼

八千草の露ともあかず分くる野に限なく照らす長月の影

東園 中將

末遠き野もせの露にかげとめて名にしおふ野の月のさやけさ

藤谷 中將

くまもなき野もせの露にやどりきてともに光を磨く月影

冷泉 中將

秋の野のみ幸はまれの今宵しも名高き月のあひにあふ影

梅園 侍從中將イ

長月の影はおしなべさやかにて今日のみ幸の野邊ぞえならぬ

享保十六年

神無月のなかば、修學院山莊の紅葉さかりなりといへば、十日あまり八日思



ひたつ紅葉は今さかりなるもあり、いまだ染めあへぬもあり、またちりぬる木木もありといふ。さらば紅葉は目をなぐさむるほどの事もあらじ。いかかはせむと思ふに、山莊の池に舟を浮べたる事は、昔後水尾院の御幸ありし時代のままにて、その舟多年のこりてありしかども、いつのほどにか朽損じて後は、四十四年を経て舟の浮べることなし。此度は舟の興をもよほすべしとて、ここもとの池なる舟どもやらせられたれど、池のひろきに舟のちひさかるべし。ともなふやからもあるべければ、いかがすべきと思ひわづらひて、角倉が方にある高瀬舟のうち、山莊の池に相應すべき大ききなる舟あらば、かりまうくる事はなるまじきやと、諸司代に仰せつかはしたれば、いとやすき事、申つくべきよしを、こころよく申て、やがて角倉に下知してとりやす。高瀬舟のこと仰せいだしつるは十七日のことなれば、その夕つかた、角倉が方を持ちいでて山莊へつかはす。長さ七間あまり、幅一間にあまれる舟なり。雑人百人あまりにて河原をもちゆく。ほどなく夜にいりぬれば、續松どもあまたに

て、木やりの歌などいひてにぎはしきに、あたりの家家何ごとによと思ひつれど、にぎはしきに、ここかしこの家家より出でて見物などせしとなり。夜の明方に山莊へは行きつきたりしとなり。坂道のぼりかねたるよしにて、此頃より山莊につめゐし鳥山上總介など、郷の者どもなどあつめ、また人数をまして、やうやうに池には浮べたるとなり。今日はまづ吉田路ゆきて、神樂岡にかまへたる休所にいたる。山山の紅葉はまだしく見ゆ。しばらくありて諸司代まゐりて、今此所の前にゆきて見しに、智福院といへる坊外へ、かまへることもなく、よき所なるが見るべきにやと申す。かねがね聞きおよびたる所なれば、よかるべしとて行く。山越にていささか坂道なり。その道のほどに、往來のものに見するからくりの物、賣薬などあるを見つつ、また坂道をのぼる。虚空藏菩薩の堂あり。しばらくたちて祈念して後、そこを過ぐれば、やがて座敷の前なる庭なり。座敷にいたりて見れば、おもひしよりもひろく、八疊、六疊、八疊の間むかひへつづきたり。真如堂の中まぢかく見ゆ。かねならびてあるな



どこまやかに見ゆ。佛壇は見えす。この座敷にて晝のかれいひ食ひて、しばらく休らふ。近き頃までは鞠のかきありしよしなれば、いづれの所にかと問ふ。此庭つづき北にありといふ。今は島になして野菜のみありといふ。此南の庭は松の木高き一本ありて、めぐりは生垣なり。此所にて蹴鞠見るべしといひて、京へ鞠をとりて遣はす。程もなく持てきつれば、鞠足の輩庭にたつ。式部卿宮、中務卿宮、智恩院宮、久世前中納言従久朝臣、公熙等なり。しばらく見物す。それより先に、押小路前宰相此所の章句などはなきかと問へばやがて出す。

催興東岡舍

押小路前宰相

态望南霽軒

愚作

鞠柳只知福

同

歌席偏榮恩

押小路前宰相

楓樹導仙蹕

妙法院宮

竹林避俗喧

愚作

鶴群殘月嘆

一乘院宮

兔競片波奔

妙法院宮

釣外求何事

押小路前宰相

醉中綴俚言

一乘院宮

日たけぬといへば、輿にのりて山莊にゆく。壽月觀の前なる大木のみちぢ分の盛なり。その外はいまだ染めつくさぬ木ども少少あり。しばらくの後まづ林丘寺へまうづべきとて出立つ。あゆみて裏門よりいる。宮宮方同道いささか饗應の後、音羽川の道を経て隣雲にいたる。例の軒端のみちぢ、一木はちりぬれど、今一木の大きな、千入染めつくして十分の盛なり。その外の木は落葉したるもあり、またいまだ下染なるもあれば、

さかりなる木木はのこすくなきもみち葉にあたりのちしほいそぐ山風などいささかうちながめて、今朝うかべたる舟に乗る。おのおのともなひきて乗れば、われよりさきに大きき一尺ばかりなる龜舟のうちにある。いつよ



りいりてゐつらむ。はじめ乗る舟に、吉瑞なりと口口に申す。此舟七間にあ  
 まれる舟なれば、二十五人同舟なり。めづらしき事とこなたかなた漕ぎめぐ  
 る。中島のほとりにいたりて見れば、そのかみ七十年前に舟に乗りてとほり  
 しこと、たしかにおぼえたる赤石二つの間あり。ただ今乗れる舟はおほきな  
 れば、とほるべからず。そのうへ多年手をいれざる池なれば、土のなだれ草芥  
 もかさなりて、今は小舟ならではとほるまじきさまなり。此所舟にのりて見  
 れば、汀より見えず。七十年まへ幼少の昔さらに思ひ出でて見る。しばらくの  
 後陸にのぼり、隣雲にいたり、晚炊おのおのしたためて、いまだ日も残りたれ  
 ばまた舟に乗る。とかくするほどに夜に入りぬれば、おなじく月待ち出でて  
 見ばやとて、いささか盃とりなどすれど、東の山ちかければ、月は出でたるけ  
 しきにもあらざれば、ここにて見るべくもあらず。やうやう夜も更けぬれば、  
 舟より出でてすぐに壽月觀にゆく。龜はとりてかへりて庭の面にはなちぬ  
 おのおのみちの歌。

式部卿宮

み舟こぐ池水ひろみそめてこき岸の紅葉のあかぬこの本

中務卿宮

色深き山のもみぢやみ幸する今日のめぐみの露（こ）にそめけむ

一乗院宮

時雨もやわきて染めけむ世に知らぬ雲の隣の軒のもみぢ葉

鳥丸大納言

みゆきしてめづる紅葉のから錦立田の山もよそにやは見む

久世前中納言

薄く濃きなかに軒端の一本やみゆきを時とそめつくしけむ

武者小路三位

あまりあるめぐみの露に下草も染めて色こき山のもみぢば

祇題<sub>三</sub>修學離宮後日出末

胤智恩院宮

元陵御記 下卷



風物穩看修學村  
天光日色豈唯裕

猶今玉輦離宮園  
紅葉池邊鷓首敦

龜の歌

愚詠

もろ人も契れよろづ代舟のうちに見るはまれなる龜の齡を

式部卿宮

萬代のおのがよはひをこの君に譲らむとてや龜もいでけむ

中務卿宮

萬代のよはひともなふ龜とてや君が御舟をしたひきぬらむ

一乘院宮

すむ龜も心にのりて契るらし舟さすみゆき飽かぬよろづ代

鳥丸前大納言

つきせじな君にひかれて御舟にも入江の龜のおのがよはひは

久世中納言

さき立ちて今日の御舟に入る龜の齡は君やかぞへとらまし

武者小路三位

龜もまたいでてや遊ぶよろづ代を君に契りてすまむ御池に

尊胤

賀龜入舟中  
玉虹千丈白波鮮

行幸綠池幾萬年

長仰南山松柏壽

清卿使者乘樓船

かくてあくる十九日、梶井宮、青蓮院宮、妙法院宮など、山莊の紅葉見るべきよし仰遣はすはじめてなり。三門跡共に來臨、梶青宮は此山莊はじめてなり、聞及びしよりはひろびろと風景もよきよし申されて、舟などにも乗りて、終日悦のよしなり。昨日の人數にもれたる院參の堂上、非藏人等數多參集せしむ。

堯 恭妙法院宮

紅楓高下繞亭頭  
金殿瑤池世埃外

靜泛蘭舟橫碧流  
清遊一日在丹丘



右修學院舟中作

またそのあくるはつか中院前内府、中山前大納言、三條前大納言、愛宕前中納言、依所伏原二位等を山莊にめす。その外きのふもれたる堂上非藏人等あまた參集す。終日舟に乗り、酒宴發聲入興のよしなり。

中院前内府

この山はそめぬ松さへもみぢ葉の交るに見ればいひ知らずして

醍醐前内府

舟うけてめぐるに池の中嶋もたためる岩もここは世に似ぬ

三條前大納言

時雨もやわきて色こく染めつらむ雲の隣の軒のもみぢは

# 御撰集 第一卷終

(岡田三郎助意匠) (佃製本)

御撰集 第壹卷

(非賣品)

大正四年九月十日印刷  
大正四年九月十三日發行

版 權 所 有



編纂者兼  
發行所

列聖全集編纂會  
東京市麴町區内幸町一丁目三番地

右代表者

中塚榮次郎  
東京市赤坂區青山高樹町十二番地

印刷者

井上源之丞  
東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社本所分工場  
東京市本所區番場町四番地

發行所

電話新橋一三二七番  
振替東京二九八八番

列聖全集編纂會

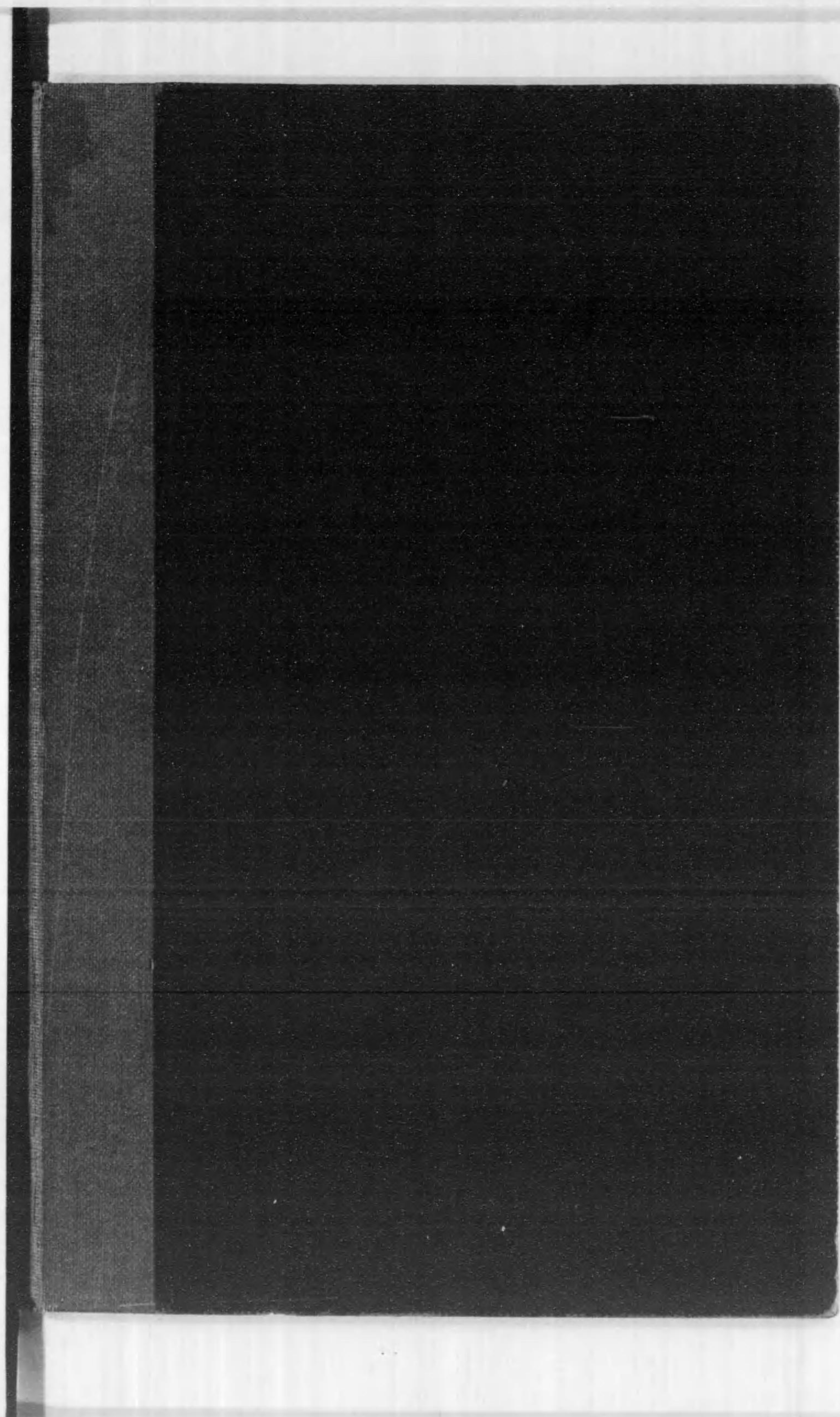


080  
R78

328  
378

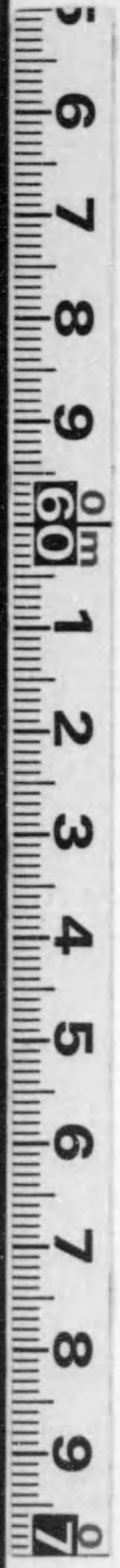


終





328  
378



始





